あわじ環境未来島構想

環境未来都市提案書　参考資料一覧

参考１　あわじ環境未来島構想のポイント

参考２　位置図

参考３　あわじ環境未来島構想　環境未来都市・総合特区活用の考え方

参考４　あわじ環境未来島構想　目標設定の考え方

参考５　あわじ環境未来島構想推進協議会の協議の概要

参考６　淡路島の自然と文化

参考７　あわじ環境未来島構想シンポジウム報告書

あわじ環境未来島構想のポイント

（平成２３年９月
兵庫県・洲本市・南あわじ市・淡路市）

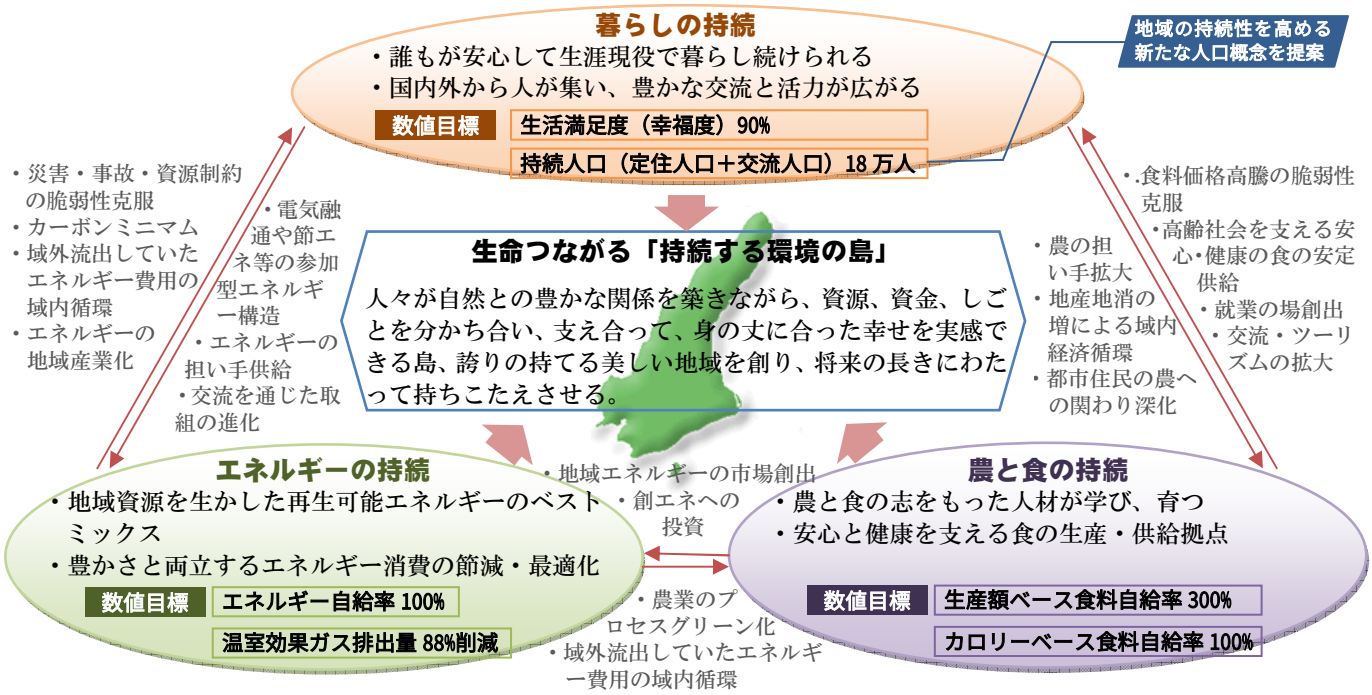
1　構想の趣旨　～多様な主体の創意工夫による社会実験と課題解決先進地としての貢献

○エネルギーと食を基盤に暮らしが持続する地域をつくる構想全体を、技術革新やビジネスモデルといった産業視点に加え、地域社会の受容や合意形成、様々な主体の協働・費用負担のあり方など、多面的に検証する社会実験として展開。
○得られた知見は、国内他地域への展開を通じた日本再生はもちろん、今後、少子高齢化や人口の減少・偏在、低成長や、さらにマイナス成長といった同様の課題に直面する海外への貢献につなぐ。

2　地域共有の将来像と明確な数値目標（2050 年）　～「まち」から「むら」への未来モデル

課題認識
◇世界の人口増、経済発展による資源制約、環境への負荷
◇災害等への脆弱性（東南海・南海地震の 30 年内確率 60%）
◇人口の減少・偏在化、高齢化による国土維持力への懸念

基本方向
農漁村の豊かな再生可能資源を基盤に「まち」から「むら」への流れを創り、自然の恵みを分かち合いつつ、都市と農村が共生する新たな国づくりモデルを提示



3　数値目標の考え方　～長期視点の目標設定、総合特区は短期目標として位置付け

エネルギーの持続	成果指標	淡路島現状	特区目標 2016 年	環境未来都市目標 2020 年	2030 年	2050 年
欧州を範に再生可能エネルギー 100%自給と国を上回る CO_2 削減に取組む【参考】わが国再生可能エネルギー自給率 3.2%（大規模水力込み 9.0%）	エネルギー(電力)自給率	7%（10 年）	17%	20%	35% 国目標 20%	100%
	温室効果ガス排出量（1990 年比）	▲19%（08 年）	▲32%	▲39% 国目標▲25%	▲55%	▲88% 国目標▲80%

（取組指標）再生可能エネルギー生産量、一家庭・一事業所当たりエネルギー消費量、環境対応自動車普及率

農と食の持続	成果指標	淡路島現状	特区目標 2016 年	環境未来都市目標 2020 年	2030 年	2050 年
上質で安心な自然の恵みを国内外に供給する農の力を維持【参考】わが国自給率は長期で低下し、65 年 86%→01 年 70%。首位は宮崎県 263%	食料自給率（生産額）	333%（09 年）	－	300%以上 国目標 70%	300%以上	300%以上
	食料自給率（カロリー）	104%（09 年）	－	100%以上 国目標 50%	100%以上	100%以上

（取組指標）新規就農者数、認定農業者数、一戸当たり農業生産額、耕作放棄地面積の減

暮らしの持続	成果指標	淡路島現状	特区目標 2016 年	環境未来都市目標 2020 年	2030 年	2050 年
定住人口減は不可避。交流人口を含む持続人口を提案。その定常化を生活の質向上と一体でめざす【参考】生活満足度の首位はデンマーク 90%	生活満足度（幸福度）	54%（11 年）	－	60%	70%	90%
	持続人口（定住人口+交流人口）	18 万 1 千人（10 年）	17 万 4 千人	17 万 5 千人	17 万 3 千人	18 万 1 千人

（取組指標）出生者数、転入者数、転出者数、観光入込客数、二地域居住者数

注）淡路島の定住人口推計値は 50 年に 7 万 7 千人（▲46%）。目標設定ではこれを減少率が約半分の 10 万 7 千人とする。交流人口はツーリスト 365 分の 1 又は 365 分の 2（日帰り・宿泊の別）、二地域居住者 7 分の 2 で定住人口に換算。

4　志と意欲をもった民間・大学が結集し、地域・公と連携

○昨年春から産･学･公･地域の検討組織を立ち上げ、プロジェクトの議論を積み重ね。そのプロセスでやる気と実行力をもった４２の企業・大学等が結集。
○これらの主体が連携し、プロジェクトを担うが、既に一部のプロジェクトは先行着手するなど熟度は高い。
○将来的には、地域協議会を母体にＳＰＣ（特別目的会社）を生み出すとともに、地域協議会を、資源配分を含めた総合マネジメントを図る持ち株会社へ移行することを検討。

淡路島特区構想推進委員会（H22.5 月～、住民・地域団体・学識者・県・３市で構成）＋重点地区、全島横断の事業毎にユニット群を発足（H22.10 月～、産学公地域で構成）

・総合特区の国提案（H22.9 月）
・総合特区調査回答（H23.3 月）
・環境未来都市の国提案（H23.5 月）

事業に参加し、協働し、応援する島内地域団体・ＮＰＯ・住民グループ４２主体（島内住民・経済団体のほぼすべて）

参加
協働
応援

それぞれの強みを生かし、事業を担う島内外の４２主体
＜民間企業＞２２社　＜地域農水・商工団体＞５団体
＜大学＞国内７大学・海外１大学
＜公的機関＞３機関　＜自治体＞４団体

あわじ環境未来島構想推進協議会（H23.9 月発足）～総合特区の地域協議会、環境未来都市の推進母体

企画委員会【総合的なマネジメントと事業評価】
～主要地域団体・学識者・県・３市で構成

部会【事業化推進チーム）　*順次立ち上げ
～五色・沼島・野島の地区別、全島横断の事業別に産学公地域で構成

アドバイザー【助言、ヒト・モノ・情報のマッチング、ネットワーク化支援】
～第一線で活躍する有識者で構成

先進地やアジア島嶼との戦略的な連携（デンマーク・ボーンホルム島、英ワイト島等）

H23.6 月　駐日デンマーク大使来島・協議
H23.9 月　地元市がデンマークを訪問、連携・交流を協議

あわじ環境市民ファンド

エネルギー・農への志金出資と島民参加

事業体

SPC

SPC

事業体

将来構想　あわじ環境未来島ホールディングス

持ち株会社への発展：ガバナンス強化、適切な資源配分

5　産・学・公・地域が連携した熟度の高いプロジェクト群

注）アルファベットは「７　先駆的な取組」参照

区　分	主な取組／全体像を環境未来都市申請に反映し、このうち規制改革等が不可欠な取組等は総合特区でも申請（下記特区）
全島横断 -エネルギー、農と食、暮らしの持続に向けた挙島一致の基盤形成	再生可能資源を生かした多様なエネルギー創出　A ・民間の低コストモデル等を生かした家庭・事業所の太陽光発電拡大　特区 ・広大な土取り跡地を再生する大型太陽光発電所の整備（複数箇所）特区 ・日本有数の潮流を生かした潮流発電の検討（日本最速の鳴門海峡など３海峡）特区 再生可能エネルギーと市民をつなぐしくみづくり　B ・あわじ環境市民ファンドによるエネルギー投資と運営参加　特区 多様な主体の創意工夫によるエネルギー消費の節減・最適化 ・家庭・事業所それぞれの省エネ診断による無駄排除　特区 食のブランド「淡路島」づくり ・島内での海の幸山の幸の提供、島外での販路拡大などブランド化戦略の推進 地域の風土と文化に根差したしごと創出 ・農の６次化やツーリズム資源の活用など誰もが役割がある地域づくり
重点地区 -多様な先導モデルによるネットワーク型未来都市 （将来は他地域へ波及） ■は先行地区	洲本市五色町：エネルギーと暮らしの自立モデル　一部特区　C バイオマス発電等の創エネ、高齢者対応の健康維持・低炭素移動手段、農漁業のグリーン化と、高齢者の見守り機能等を併せ持った需要家参加型の仮想エネルギーマネジメントによるスマートコミュニティ形成 南あわじ市沼島：エネルギーとなりわいの自立モデル　一部特区　C 家庭での太陽光発電・蓄エネ、蓄電池間の電力融通、仮想電力料金制度、漁業の低炭素化を組み合わせた災害にも強いエネルギー自立と、漁業・エネルギーを生かしたブルー・エコツーリズムの島づくり 淡路市野島：農と食の人材育成モデル　特区　D 若者等の農業トレーニングと耕作放棄地の活用を通じた担い手育成、廃校活用のエコ薬草工場やエコクラインガルテンなどアグリ・スマートビレッジづくり 洲本市中心市街地：交流空間モデル　南あわじ市志知：農と福祉の人材育成拠点モデル　D 淡路市長沢・生田・五斗長：歴史文化活用モデル　淡路市南鵜崎：健康長寿モデル

6　将来像実現に向けた戦略的な工程

	短期（～2016 年） 基盤づくりと先導モデル形成	中期（～2020 年） モデルの多様化と島内外への波及	長期（2020 年～2050 年） 将来像の実現と国際連携の深化
エネルギーの持続	・再生可能エネルギー・ベストミックスへのＦＳ、実証展開 ・省エネライフスタイルへの意識改革	・再生可能エネルギー・ベストミックスの本格展開と地域マネジメント ・地域のエネルギー事業への参画拡大	・全島でのユビキタス・エネルギーの実現 ・個性的な豊かさをもったスマートコミュニティ・ネットワークを形成 ・都市や海外と豊かさのシェア
農と食の持続 暮らしの持続	・公民協働の人づくり・なりわいづくり、健康・安心の絆再生など低炭素で豊かな農漁村の礎形成	・農と暮らしの活性化・持続化に向け島内地域連携の拡大 ・交流人口等の拡大戦略の本格展開	

7　環境未来島の実現をめざす先駆的な取組

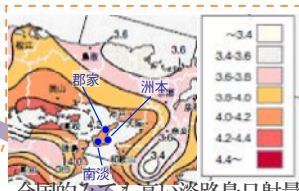
地域の再生可能資源を生かしたエネルギーのベストミックス形成　A

（環境未来都市・総合特区で申請、ただし発電ポテンシャル・発電量予測システムは環境未来都市のみ）

先行展開
・大規模太陽光発電は２社が事業実施を決め、地域協議会に参画。そのほか、
・廃食用油利用のバイオ燃料高質化
・ウェット系バイオマスの高速発酵技術
・高効率ハイブリッド発電
・発電ポテンシャル等予測システム
は国や県の公募事業採択、又は申請中

太陽と風と緑を生かした多様な地域エネルギーの創出

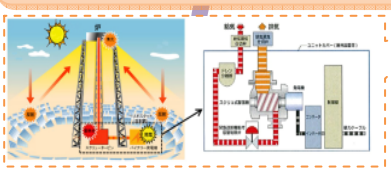
家庭・事業所用太陽光発電の普及
-民間企業が開発したコストを低減・平準化する「ソーラーエコウェーブ」、県・市支援を活用して普及を促進
（民間企業、３市、県）



最適傾斜角の日射量/NEDO（kWh/m²・日）

全国的みても高い淡路島日射量→郡家 4.11、洲本 4.19、南淡 3.92～全国平均 3.72

太陽熱発電と排熱利用バイナリー発電の高効率ハイブリッド実証
-太陽光発電の２倍超の効率性を持ち、柔軟に規模選択できる新たな発電システムを実証（民間企業、大学、洲本市、県）



広大な土取り跡地等を再生する大規模太陽光発電所の整備
-洋上空港の埋立土砂を供し、身を削ってきた淡路島から21世紀の持続モデルを担うソーラーパワーを創出。（民間企業）

淡路島の土取り跡地例(250ha)

発電ポテンシャル・発電量予測システム
-高精細３次元地形データ、実測データ等を用いて精度の高い予測を行い、未利用資源を活用（民間企業、洲本市）

良好な風況等を生かした洋上・陸上風力発電
-島西岸の強い西風、遠浅の海を活用し、未利用地や海域における風力発電を検討（民間企業、大学、洲本市）

西岸の五色と沖合い

ほぼ全域で風速5.5-6.5m/s, 全国の上位 1/3 に島全域が入る

日本有数の潮流を生かした潮流発電
-日本最速の鳴門海峡など淡路島３海峡部の潮流を生かした発電を検討
（民間企業、大学、関係市）

ウェット系からドライ系まで複合型のバイオマス活用
-菜の花エコプロジェクトの蓄積を生かし、再生可能資源を生かした発電、燃料創出を実証（民間企業、大学、洲本市）

ドライ系バイオマス資源
・剪定枝（島内年間 0.8 万 t）
・放置竹林（2,340ha）
・可燃ゴミ（洲本年間 1.6 万 t）等
ウェット系バイオマス資源
・下水等汚泥（島内年間 11 万 t）
・廃タマネギ（島内年間 0.9 万 t）
・廃食用油（洲本年間 18KL）等

★制度改革提案：大規模太陽光発電整備に係る工場立地法の規制緩和、全量買取制度における価格変更の余裕をもった事前アナウンス　等

島内外の主体をつなぎ、創エネ事業や農の活性化を進めるあわじ環境市民ファンド　B

（環境未来都市・総合特区で申請）

地域資源を生かしたエネルギーづくりに共感する市民や島内の金融機関、企業等の出資を経てファンドを組成し、再生可能エネルギーへの投資を段階的に拡大（大規模太陽光発電所にも一部出資で事業者と協議）。
ファンドと市民の関わりを通じ、地域資源の大切さ、多様な資源をエネルギーに活用することを生活レベルで確かめ、地域の持続性を高める具体の行動につなぐ。

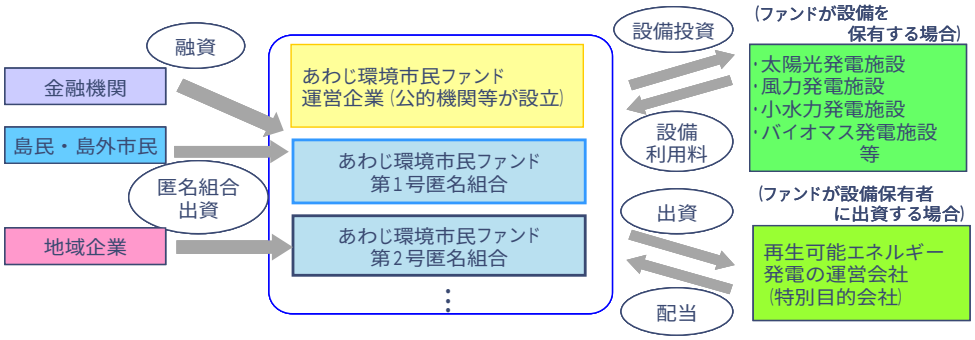
第１段階
これまで島外に流出していたエネルギーコストを島内に留め、環境を軸とした地域資金循環のしくみを構築。

第２段階
生み出された地域資金循環を生かし、再生可能エネルギーへの再投資や島の基幹産業である農水産業、ツーリズム産業に日本版ＣＳＡとして市民出資する枠組みへの発展をめざす。CSA=Community Supported Agriculture）

デンマークでは農業協同組合に似た住民出資の風力発電協同組合が施設を保有。
風という地域資産を住民自ら生かす観点から風力発電が進んできた。

第３段階
多くの市民がファンド運営に関わる中で事業運営のスキルを磨き、構想に係わる各プロジェクトや特別目的会社の運営に参画。
さらに将来的に、ファンド運営会社は、これら関係事業を総合的にマネジメントする持ち株会社へ移行することを検討。

先行展開
H23.8 月に住民代表、地域金融機関、学識者、３市、県等で地域協議会ファンド部会を発足。
スキーム具体化に向けて検討を進めている。



★制度改革提案：ファンド運営等に係る金融商品取引法等の手続き緩和、ファンド運営会社出資への地域活性化特区税制の適用　等

エネルギー自立と生活の質向上が両立するスマートコミュニティづくり　C

（五色の「多様な創エネ」は環境未来都市・総合特区で申請、その他は環境未来都市のみ）

需要追従型から、地球の限界をふまえた持続型の地域エネルギー構造へのシフトをめざし、域内で生産可能なエネルギー量を住民や事業者らが認識し、効率的に融通（平準化）や節エネに取り組みながら、生活の安心確保や質の向上も図る多自然地域の持続モデルを創る。

洲本市五色モデル　～あわじＡＥＭＳ（Area Energy Management System）の実証展開

（民間企業、大学、洲本市、県、公的機関、地域団体）

多様な創エネ
バイオマス、太陽熱、太陽光、洋上・陸上風力の利用

あわじＡＥＭＳプラットフォーム（仮想グリッド）
再生可能エネルギー発電所と一般世帯、事業所を結ぶ仮想のグリッドによりエネルギーを同時同量制御。

あわじライフアシスト・ターミナル（スマート端末）
ＡＥＭＳの中でエネルギー消費の最適化を図るとともに、生活の安心やコミュニティ再生に役立つ端末を需要家に配置。
- 家庭や事業所単位、さらに域内エネルギー需給可視化
- 水・熱の消費量可視化　・高齢者の見守り、健康管理
- ディマンドタクシーの配車予約、ＥＶの給電・課金
- 防災・防犯情報の通知　・コミュニティ内の情報共有
- 仮想グリッド内でエネルギー需給が逼迫した場合の協力要請や節エネ目標設定と実績のデータベース化・ＰＤＣＡ等

☆太陽光発電普及のため、集会所活用、既存住宅での個々人の背中を後押しするしくみとして、家庭・事業所別ではなく、コミュニティ単位でグリーン電力証書を成立させ、地域へ還元するしくみも検討

★高齢者の転倒防止・健康維持に配慮した３輪電動アシスト自転車など高齢社会の移動手段、及び化石燃料に頼る漁船のグリーン化として、電動漁船（五色）、ハイブリッド漁船（沼島）の実証も展開

南あわじ市沼島モデル　～離島における災害に強いエネルギー自立の実証展開

（民間企業、大学、南あわじ市、県、公的機関、地域団体）

全世帯（250 世帯）参加の仮想の電力累進料金制度による社会実験
家庭に太陽光発電 1kw、蓄電池 1kw、スマートメーター、太陽熱温水器を配備し、創意工夫による省エネや効率消費を実行。
使用量に応じて累進制料金を課す仮想電力料金体系（ポイントで表示・蓄積）と併せ、島ぐるみでのエネルギー自立の社会実験に取り組む。

＋

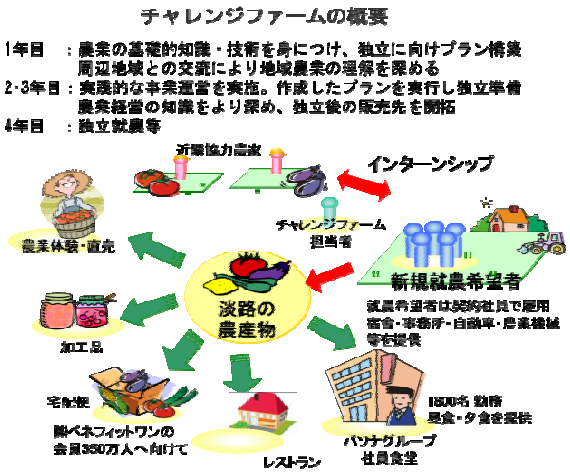
スーパーグリッドの実証と減災拠点づくり
津波被害を想定し、高所の２施設に太陽光発電と蓄電池を設置。直流でつなぎ電力相互融通の実証を行うとともに、平時はハイブリッド漁船、電動カート等に給電。

★制度改革提案：ＥＶ充電器に係る一の需要場所での複数契約の可能化、電動アシスト自転車に係る道路交通法のアシスト比率緩和　等

農を担う人づくりと耕作放棄地対策の一体展開など公民連携による健康の里づくり　D

（環境未来都市・総合特区で申請）

民間企業が３年前から淡路島で開始した若者の就農トレーニングを行うチャレンジファーム事業を耕作放棄地の活用、就農支援等と一体で充実するほか、農と軸とした地域再生の人材を育てる大学を整備。
さらに高齢社会を見据え、健康を支える薬草のエコ水耕栽培、環境と人を再生するエコガルテンに地域の環境・資源を生かした多様なセラピープログラムとの連携で取組む。（民間企業、国内外大学、淡路市、南あわじ市、県、地域団体等）



チャレンジファーム（ＣＦ）による人材養成
３年課程で実践・座学のデュアルにより農業者や６次化人材を育てる事業の受入れを拡大。現行 10 名を 10 年後 100 名へ。

企業・行政連携の耕作放棄地の徹底活用
450ha の農地開発をするも 1/3 が耕作放棄された地域で、企業のもつ全国ネットワークを活用して不在地主との調整等を行い、就農支援。

フランチャイズによる就農支援
島内外協働の農業生産法人立ち上げ
フランチャイズの考え方を取入れ、ＣＦ運営企業が修了生の独立就農や６次化起業を支援。雇用就農の受け皿として、都市消費者と農をつなぐ農業生産法人を設立。

農を軸に地域再生の担い手を育成する大学づくり
廃校を活用し、農漁業を中心に環境・福祉を融合させた地域再生人材を育成する大学整備に民間と地域連携で取り組む。

廃校活用のエコ植物工場での薬草栽培
各国が薬草の輸出抑制をするなか、その確保が課題に。安定生産可能な植物工場、量の拡大が容易な露地栽培の両面でプロセスのグリーン化・省エネ化を図った高付加価値な薬草栽培に取り組む。

環境と人を再生するエコガルテンづくり
埋立用土取り跡の回復を図りつつ、都市住民が心身の元気を回復する滞在型農園や野菜工場を備えた健康・癒しの村づくりに取組む。将来的にはエネルギー自給力の高いスマートビレッジをめざす。

連携

健康の島づくり
環境･資源を生かし、園芸療法･断食･アロマ･温泉･タラソ･ウォーキング･サイクリングの健康プロジェクト展開

★制度改革提案：農地集積円滑化団体の指定に係る農業経営基盤強化促進法の緩和、海外人材の家族への出入国規制の緩和　等

淡路島の概要と地域のやる気

1　淡路島の概要

○本申請の対象地域である淡路島は、大阪・神戸等の関西大都市圏から陸路で１時間圏の好立地にあり、面積はシンガポール、東京23区と同規模の590k㎡、人口14万人を抱える瀬戸内海最大の島である。
○島の西側は瀬戸内海、東側は大阪湾、南側は紀伊水道に面して漁業が行われ、また、年中通して温暖な気候であることから農業も盛んで３毛作も行われている。

2　地域における環境、エネルギー、農に関する取組の現状

＜環境・暮らし＞
○古事記に記された日本の始まりの地として、淡路島では「古を稽えて今を照らす（いにしへをかむがえていまをてらす）」という古事記の言葉どおり、先人から受け継がれてきた自然、環境、風景、さらに空間に刻まれた履歴を何物にも代え難い財産として大切に守ってきた。
○緑豊かな環境を守る県条例を先駆的に淡路島に適用することとなったのもそうした環境への島人の思いが背景にある。現在も、住民・地域が創り上げた淡路島の将来ビジョンにおいて、「人と自然の豊かな調和をめざす環境立島」が地域づくりの基本理念として掲げられ、世代を超えたつながりの再生から環境保全のための活動まで、広範な取組が展開されている。

＜エネルギー＞
○淡路島では、かねてから菜の花エコプロジェクトとして、休耕田等に植えた菜の花の種を搾油し、家庭で利用。その廃棄油を回収してＢＤＦ（バイオディーゼル燃料）を精製し、ＢＤＦ発電による公園照明、ＢＤＦコミュニティバスに活用してきた。
○さらに、再生可能エネルギーを活用した発電事業として、既にメガソーラー発電事業（県・淡路市事業）、民間や行政の風力発電事業（３市域、大型ウィンドファームも２ヶ所）、潮流発電実験（明石海峡）がおこなわれている。

＜農＞
○たまねぎ・レタスは全国３位、シラス・イカナゴは全国２位、淡路島の農業産出額は大阪府全体額を超えており、近畿圏における農業生産拠点となっている。
○平成20年からは、パソナグループが農業のトレーニングを行うチャレンジファームを北淡路高原に開設。全国から意欲ある若者たちがチャレンジファームの門をたたき、淡路島の豊かな風土の中で学んでいる。
○平成22年8月には、島内の生産者らが結集し、食のブランド淡路島推進協議会が発足し、島内外でブランド化戦略を展開している。

3　地域における課題

課題１：再生可能エネルギーの発電量と最適な組み合わせ
○淡路島には豊かな地域資源があり、太陽光、バイオマス、陸上・洋上風力などの再生可能エネルギーを活用した発電事業を推進できる環境がある。
○一方で、再生可能エネルギー発電の季節性や、１日のうちでの変動性を考慮し、地域の消費傾向に応じた組み合わせを選定しなければ、過剰な発電設備の導入につながったり、不安定性が増したり、域内全体でのランニングコストの上昇、ひいてはエネルギーコストの上昇を引き起こす可能性がある。
○ベストミックスの検討にあたっては、一定の安定稼働が期待できるバイオマス活用や供給を安定化できる蓄エネによるベースエネルギー確保も欠かせない。
○さらに、災害時に本州・四国と電力系統が分断されて孤島となった場合には、域内の再生可能エネルギー発電設備が島民にとってライフラインとなる。
○淡路島におけるエネルギー自立には、そのエネルギー消費傾向をふまえた最適な再生可能エネルギー発電量と発電種類の組み合わせが求められる。

課題２：多様な生活スタイルの域内混在

○淡路島は、都市部のようにオフィス街と住宅地が明確に分かれておらず、農業、漁業、製造業、これらと商業・サービス業の兼業など様々な就労形態がひとつのコミュニティ内に混在している。

○また、大規模開発など人工的につくられたコミュニティが少なく、三世帯同居、核家族、高齢者独居など世帯の人員構成が画一的でない地域が多い。

○そのため、地域ごとにエネルギー消費の傾向をステレオタイプ化（例：住宅地は夜19：00～21：00、オフィス街は朝9：00～17：00がピーク等）することが難しく、戸別・事業所単位、世帯種別単位でのエネルギー消費行動のデータベース化及び分析を通じたエネルギー消費最適化の試みが求められる。

課題３：基幹産業である農の担い手の減少と高齢化

○淡路島の食料自給率は生産額ベースで333％、カロリーベースで104％を超えているものの、93年に360億円あった農業生産額は近年148億円まで低下している。その背景には担い手の高齢化・減少があり、20年間で販売農家数は42％減少している。漁業者も同様の担い手減が続いている。

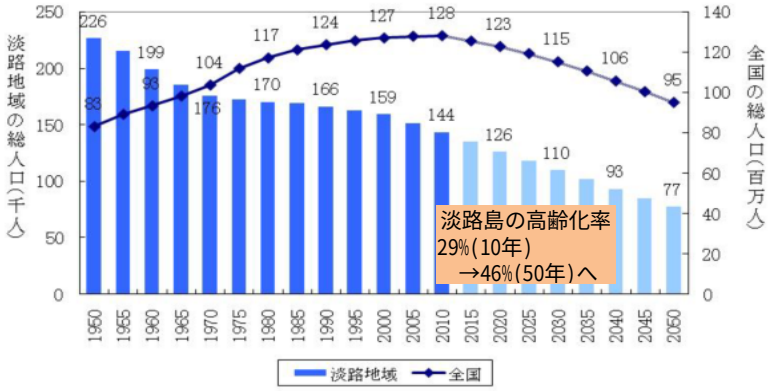
○農漁業については、新たな担い手に地域を開き、人を育てながら、とりわけ農業は、年々増える耕作放棄地の活用や農地の集約化を図ることが必要となっている。

課題４：人口減少・超高齢化

○淡路島は日本の多くの農山漁村と同様に人口減少と高齢化に直面している。特に約590km²にもわたる広い地域に集落が点在していることから移動手段や単身及び高齢夫婦世帯とのつながりの確保が難しくなっている。

○高齢者にやさしく、地域で支える移動手段や、ＩＣＴの活用による共助など、これまでにない手法で住民のクオリティ・オブ・ライフ（ＱＯＬ）を維持・向上策が求められている。

＜淡路島と全国の人口推移＞



4　なぜ淡路島なのか（淡路島の可能性）

・エネルギーと食料の自給自足を提唱し、実現できる恵まれた地理的条件

…　高い食料自給率、温暖な気候、豊富な日照、活用可能な広大な未利用地が多数存在

・世界に向けた「環境未来都市」の成果の発信・可視化が容易な立地条件

…　京阪神大都市圏に隣接、関西国際空港等の良好なアクセス、独立した島であること

・「国生みの島」を誇りとする住民の強い団結力と「環境立島」に向けた取組の蓄積

…　農漁業を軸に積み重ねられてきた地域独自の知恵・文化、環境立島を目指す多彩な住民運動の蓄積と、これを支えてきた熱い住民たち

5　地域主導による明確な取組姿勢（県・３市による独自の予算措置と体制整備）

＜財政措置＞

平年の通常事業に加え、県・３市が平成23年度から次の事業を新規に予算措置（計５億７千万円）。あわじ環境未来島構想の実現のため、できることから地域主導で先行展開を図っている。

○エネルギー持続／１６０百万円：淡路島限定の太陽光発電整備補助（事業者向け）や電気自動車等補助　等

○農と食の持続／３８５百万円：農学系大学基礎調査費、プラグインハイブリッド漁船開発　等

○暮らしの持続／２９百万円：ディマンドタクシー運行事業、住民グループ等の先駆的取組を支援する未来島づくり活動応援事業　等

＜体制整備＞

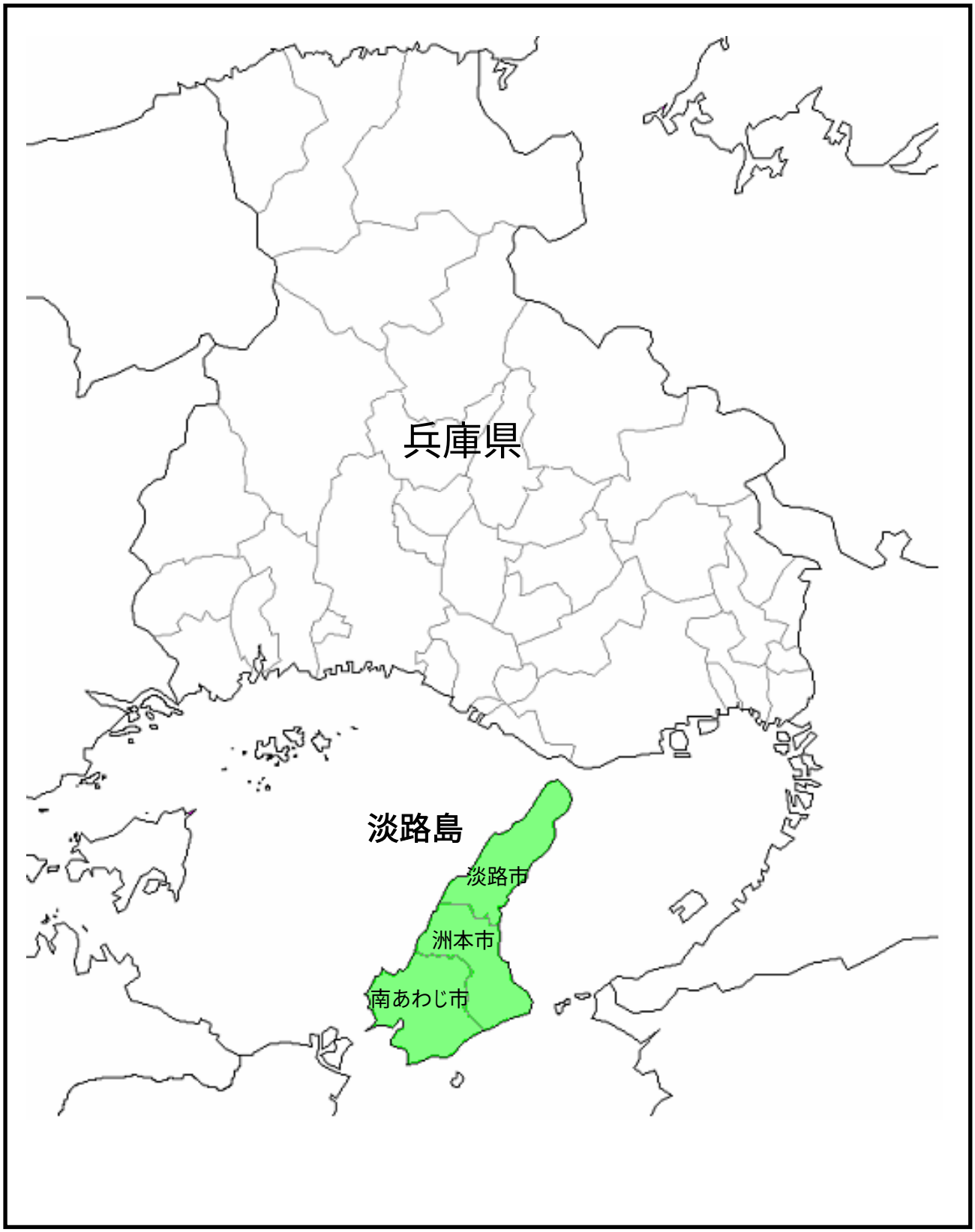
本年４月、淡路島における県の総合地方機関である淡路県民局（洲本市内）に、あわじ環境未来島構想の推進と総合調整を担う「淡路振興課」を新設（県と３市からの派遣職員で構成）。

さらに県・３市のトップレベルでも昨年から構想を議論。

6　構想実現のために不可欠な規制改革等の積極的な提案

○規制改革１５件　○事業制度提案３件　○税制提案５件　○金融制度提案２件　○財政制度提案４件

位　　置　　図



土取り跡地
（野島貴船用地）
明石海峡
播磨灘
淡路市野島
淡路市長沢・生田・五斗長
淡路市南鵜崎
大阪湾
洲本市五色
土取り跡地
（津名東生産団地）
洲本中心市街地
南あわじ市志知
土取り地
（太平洋ｾﾒﾝﾄ内田鉱業所）
紀淡海峡
鳴門海峡
南あわじ市沼島
太平洋

あわじ環境未来島構想　環境未来都市・総合特区活用の考え方

あわじ環境未来島構想

人口減少・高齢化、経済縮小が著しく進む淡路島の活性化を目指す住民主体・地域主導の構想
（H22.9.21県・淡路島３市の共同で国に提案）

＜目指す地域像＞

命つながる「持続する環境の島」

人々が、自然との豊かな関係を築きながら、資源、資金、仕事を分かち合い、支え合って、身の丈に合った幸せを実感できる社会、誇りの持てる美しい地域をつくり、これを将来の長きにわたって持ちこたえさせる。

1）エネルギーの持続
2）農と食の持続
3）暮らしの持続

＜取組内容＞

エネルギーの持続

①太陽の恵みを生かすユビキタス発電

②太陽の力で移動　持続可能な交通網整備

③地域特性にあったバイオマス利用

④エネルギー自給島

農と食の持続

⑤世界に開かれた食・農人材育成拠点

⑥農のエネルギーイノベーション

⑦農の生産・流通イノベーション

暮らしの持続

⑧健康長寿島

⑨あわじスタイルの観光・ツーリズム

⑩島まるごとミュージアム化

⑪国際交流と国生み文化の発信拠点

《その他含め計50余りのプロジェクト群》

地元主導の構想を国との協働プロジェクトと位置づけ

基本的にそのまま記載

取組の重点化
①重点的に取り組む地区を設定
②熟度の高い取組に絞込み

環境未来都市

根拠：新成長戦略（H22.6.18閣議決定）
目的：環境・超高齢化対応等に向けた人間中心の新たな価値を創造する都市を目指す

＜将来ビジョン＞

命つながる「持続する環境の島」

2050年を想定した地域が目指すべき将来像を明記

＜重点地区の設定＞

先行：五色（洲本市）、沼島（南あわじ市）、野島（淡路市）
その他：洲本中心市街地（洲本市）、志知（南あわじ市）、長沢・生田・五斗長（淡路市）、南鵜崎（淡路市）

＜取組内容＞

1　エネルギーの持続
・地域資源を活用した再生可能エネルギー創出（全島・五色・沼島）
・地域でのエネルギー創出を支える仕組みづくり（全島・五色）
・環境にやさしい乗り物の普及促進（全島）
・家庭・事業所でのエネルギー消費最適化（全島・五色・沼島）
・「あわじ環境未来島」島民率先行動の推進（全島）

2　農と食の持続
・農と食の人材育成（野島・志知）
・漁船の電動化・ﾊｲﾌﾞﾘｯﾄﾞ化による漁業のｸﾞﾘｰﾝ化（五色・沼島）
・食のブランド「淡路島」の推進（全島）

3　暮らしの持続
・健康長寿島づくり（洲本・志知・南鵜崎）
・高齢者にやさしい持続交通システムの構築（五色・沼島）
・地域資源を生かした小規模集落の活性化（長沢）
・島まるごとミュージアム化の推進（全島・長沢）
・地域資源を生かしたしごとづくり（全島）

＊ゴシック体で記載した取組が総合特区指定申請に位置づける事業である。

環境未来都市を実現するツールの一つとして活用

短期目標を設定

先行重点地区に絞り込み

さらに重点化
①規制の特例措置等を要する事業に絞込み
②熟度の高い先行重点地区の事業に絞込み

地域活性化総合特区

根拠：総合特別区域法（H23.6.22成立）
目的：先駆的取組を行う実現可能性の高い区域に国と地方の政策資源を集中

＜目標＞

命つながる「持続する環境の島」

５年以内（H28年度）までに実現を目指す目標を設定

＜重点地区の設定＞

先行：五色（洲本市）、沼島（南あわじ市）、野島（淡路市）

＜事業内容＞

1　エネルギーの持続
・地域資源を活用した再生可能エネルギー創出（全島・五色）
・地域でのエネルギー創出を支える仕組みづくり（全島）
・家庭・事業所でのエネルギー消費最適化（全島）

2　農と暮らしの持続
・農と食の人材育成（野島）
・漁船の電動化・ﾊｲﾌﾞﾘｯﾄﾞ化による漁業のｸﾞﾘｰﾝ化（五色・沼島）
・高齢者にやさしい持続交通システムの構築（五色）

＊指定区域は全島を想定（全島共通の課題に対応する上記の先導的取組群を一体的に推進）

環境未来都市を実現するツールとして活用

国競争的資金と県・市単独予算の活用

・構想実現に向け既存の競争的資金等を積極活用
【国】採択２件，申請中２件
【県 COE】採択１件，申請中１件
・その他、県・市独自予算により着実に推進

あわじ環境未来島構想　目標設定の考え方

兵庫県企画県民部ビジョン課

１　基本事項

(1) 評価指標の区分

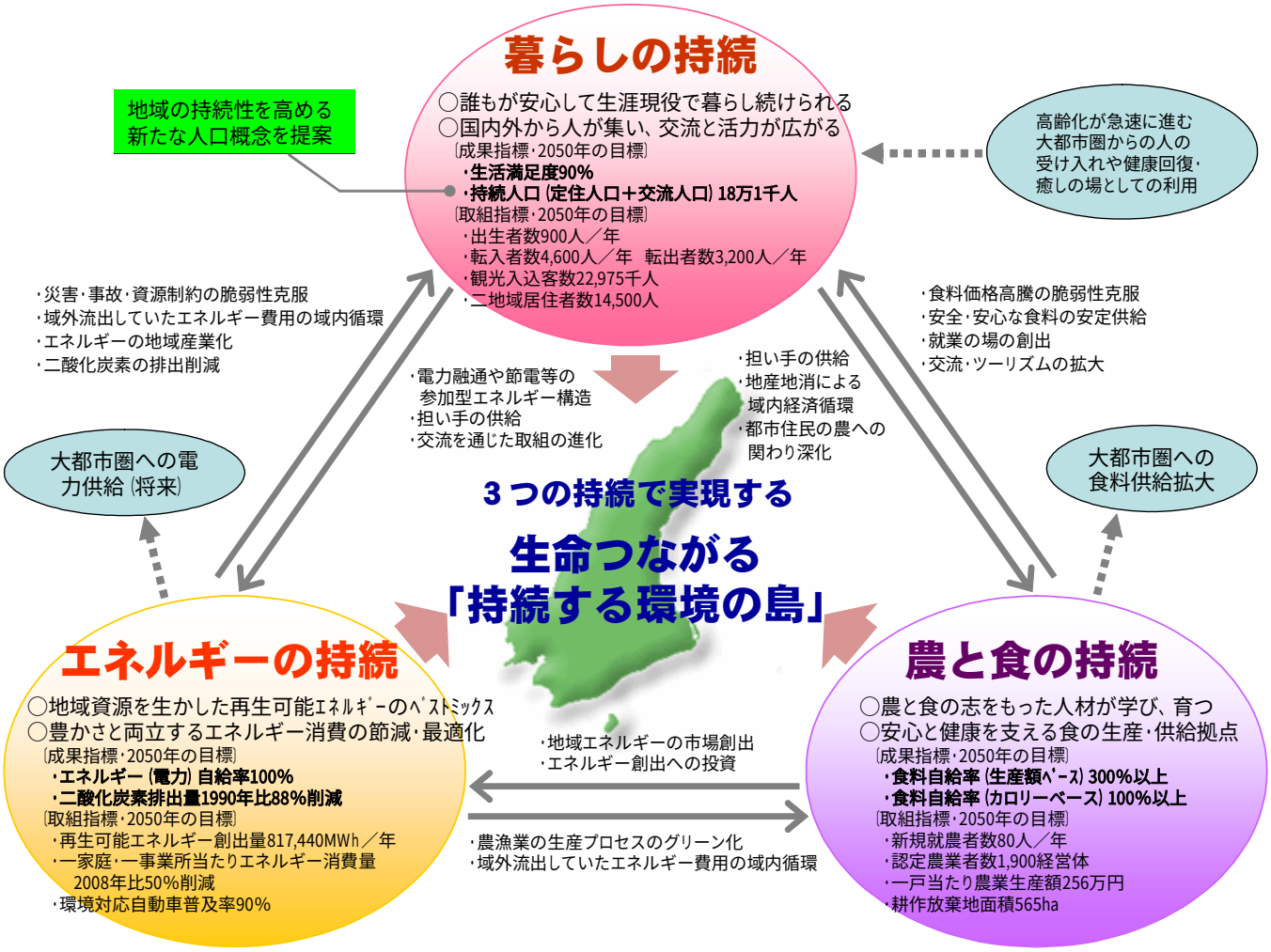
あわじ環境未来島構想の評価指標として、様々な取組の最終的な成果（アウトカム）を示す「成果指標」とその成果を達成するために実施する取組の尺度となる「取組指標」を設定。

(2) 目標設定の時期

目標値は、10年後の「2020年」、20年後の「2030年」、長期ビジョンとして40年後の「2050年」の３時点で設定。20年後の2030年までは目標達成の概ねのロードマップを提示。

(3) 指標相互の関係

本構想は「エネルギーの持続」「農と農の持続」「暮らしの持続」の3領域からなる。各領域は互いに影響し合う関係にある（下図）ため、それぞれの評価指標も相互に関連している。



（相互の関連性の例示）

- 食料自給率に加え、エネルギー自給率が向上することで、環境変化や災害等のリスクに強い自立した地域としての評価が高まり、島内への転入者・二地域居住者が増加する。
- 超高齢化に伴う自然減少は進むものの、エネルギー自立に裏打ちされた災害等のリスクへの

強さ、豊かな自然に育まれた新鮮な食材、加えて、コミュニティのまとまりや安心して暮らせる生活環境の魅力等により、子育て世代の転入が進み、島内の出生率が上昇する。

・　自然特性を生かした発電事業など再生可能エネルギーの活用や自然と調和したライフスタイルが実践される島として名を馳せ、エコツーリズムの拠点として観光入込客が増加する。

・　遊休農地や遊休施設を活用して農業や食をテーマにした産業に関わる人材の育成拠点が形成される。内外から多様な属性を持った人々が集まり、様々な出会いと交流により地域が活性化する。卒業生の多くが地域に定着し、食をテーマにした産業の担い手として活躍する。

・　再生可能エネルギーを生かした発電事業等が地域住民の資金により行われる仕組みが定着し、そこから生み出される富が地域に還元される。その一部は地域に再投資され、街並み整備や景観形成事業により快適で魅力ある空間整備が進み、観光入込客や居住者が増加する。etc.

２　エネルギーの持続

(1) 目標値

評価指標	現状値	目標値		
		2020年	2030年	2050年
成果指標				
エネルギー（電力）自給率	7% (2010年)	20%	35% (政府目標20%)	100%
二酸化炭素排出量	1990年比 19%削減 (2008年)	1990年比 39%削減 (政府目標25%減)	1990年比 55%削減	1990年比 88%削減 (政府目標80%減)
取組指標				
再生可能エネルギー創出量	83,851MWh (2010年)	219,415MWh	323,889MWh	817,440MWh
一家庭･一事業所当たり エネルギー消費量	― (1990年比2008年) (家庭30%増) (事業所12%増)	2008年比 15%削減	2008年比 30%削減	2008年比 50%削減
環境対応自動車普及率	0% (2010年)	20%	40%	90%

(2) 目標設定の考え方

〔成果指標〕

□エネルギー（電力）自給率

・　淡路島は将来エネルギーを自給する島になることを目指している。このため、2050年をターゲットとした長期目標をエネルギー自給率（電力自給率）100%と設定した。

・　2050年のエネルギー自給率100%からのバックキャスティングにより、中間目標として10年後の2020年、20年後の2030年の目標値を設定した。エネルギーの創出拡大と消費抑制の両面にわたる今後の取組によって実現可能と考えられる水準として、エネルギー自給率が10年後に20%（1/5の電力を自給）、20年後に35%（1/3の電力を自給）になるとした。

□二酸化炭素排出量

・　2020年、2030年、2050年の3時点のエネルギー消費量に対応する二酸化炭素排出量を推計し、目標値として設定した。

〔取組指標〕

・　エネルギー自給率100%達成に向けてエネルギーの創出と消費の両面から取組目標を設定。

□再生可能エネルギー創出量

・　エネルギー創出面の指標として設定。現時点で実現可能性があると見込まれる再生可能エネルギーによるエネルギー創出（大部分が発電）の総量を目標として設定した。

＊詳細な計算方法については【参考】（後述）を参照のこと。

□一家庭・一事業所当たりエネルギー消費量

・　エネルギー消費面の指標として設定。産業、民生（家庭・業務）部門の取組目標として、これまで増加傾向にある一家庭・一事業所当たりエネルギー消費量を、省エネ・節電努力により段階的に削減することとし、長期的には現在（2008年）比50%削減を目標とした。

□環境対応自動車普及率

・　エネルギー消費面の指標として設定。運輸部門の取組目標として、電気自動車、プラグイン・ハイブリッド車、燃料電池車等の環境対応自動車の普及を図ることとし、政府目標を参考に環境対応自動車普及率の目標を設定。長期的には従来型からの転換が困難な一部の車両を除く大半（90%）の自動車を環境対応自動車に転換することを目標とした。

３　農と食の持続

(1) 目標値

評価指標	現状値	目標値		
		2020年	2030年	2050年
成果指標				
食料自給率 (生産額ベース)	333% (2009年)	300%以上	300%以上	300%以上
食料自給率 (カロリーベース)	104% (2009年)	100%以上	100%以上	100%以上
取組指標				
新規就農者数	36人 (2010年度)	80人／年	80人／年	80人／年
認定農業者数	1,178経営体 (2010年)	1,539経営体	1,900経営体	1,900経営体
一戸当たり農業生産額	186万円 (2009年)	202万円 (趨勢:183万円)	218万円 (趨勢:179万円)	256万円 (趨勢:174万円)
耕作放棄地面積	1,130ha (2010年)	989ha	848ha	565ha

(2) 目標設定の考え方

〔成果指標〕

□食料自給率（生産額ベース・カロリーベース）

・　現状として高い水準にある食料自給率（生産額ベース）300%以上,（カロリーベース）100%以上を今後も維持し続けることを将来目標として設定した。

〔取組指標〕

・　人口規模の維持を目標として掲げているので、食料自給率の現状の水準を維持するためには、農業生産量（生産額）を概ね現状の水準で維持する必要がある。

・　食料価格の低迷と人口減少・高齢化に伴い農家数が減少し、農家一戸当たり生産額も減少傾向にある中で、農業生産量（生産額）の現状の水準を維持するためには、新規の担い手を確保して農家数の減少を食い止めるとともに、各担い手の生産性を高める（農家一戸当たり

生産額を上げる）ことが必要となる。

□新規就農者数

・　担い手に関する取組指標として設定。近年40名前後で推移している年間の新規就農者数を倍の80名程度に増やすこととした。

□認定農業者数

・　高い生産性を有する主力農家を増やすこととし、これに対応する指標として設定した。

・　将来目標については、認定農業者への誘導が可能と考えられる「主業農家」が現在約1,900戸あることから、今後20年内にこの層を認定農業者に誘導することとした。

・　なお、認定農業者については、政府において制度の形骸化が指摘されており、平成23年7月23日に閣議決定された規制・制度改革に係る追加方針の中では「地域や農業者の自主性を重視した主業農家中心の新たな支援策へと転換すべき」とされている。制度改正があった場合は、新たな制度のもとに指標・目標を設定し直す必要がある。

□一戸当たり農業生産額

・　農家の生産性を示す指標として設定。全体の農業生産額の規模を維持するため、担い手の減少を補うだけの生産性の向上を実現するとして、バックキャスティングにより目標を設定した。具体的には、2050年に現状の農業生産額（名目）を維持するためには、農家一戸当たり農業生産額を前年比0.8%上げ続けることが必要となる。

□耕作放棄地面積

・　耕作放棄地が拡大の一途にあり、農村空間の質を低下させているため、担い手育成の場として活用を図るほか、他用途への転換も含め、長期的にその解消を目指した取組を進める必要がある。このため、耕作放棄地面積を指標として取り上げた。

・　現在1,130ha（2010年）の耕作放棄地を2050年までに半減させることを長期目標とし、その達成に向けて耕作放棄地を毎年着実に減少させる目標設定とした。

（参考：淡路島の農家数と農業生産額の推移）

		総農家数（戸）	販売農家（戸）	専業農家	兼業農家	第1種	第2種	自給的農家（戸）	農業生産額（百万円）	販売農家1戸当たり生産額（千円）
淡路地域	2000年	12,058	10,012	1,842	8,170	1,802	6,368	2,046	19,903	1,988
	2005年	11,193	8,776	1,929	6,847	1,771	5,076	2,417	17,140	1,953
	2010年	10,497	7,970	2,152	5,818	1,309	4,509	2,527	14,846	1,863
洲本市	2000年	3,167	2,552	410	2,142	289	1,853	615	3,810	1,493
	2005年	2,923	2,215	440	1,775	320	1,455	708	3,057	1,380
	2010年	2,786	2,042	412	1,630	264	1,366	744	2,658	1,302
南あわじ市	2000年	5,126	4,565	864	3,701	1,253	2,448	561	12,052	2,640
	2005年	4,827	4,077	914	3,163	1,170	1,993	750	10,896	2,673
	2010年	4,514	3,731	1,083	2,648	819	1,829	783	9,498	2,546
淡路市	2000年	3,765	2,895	568	2,327	260	2,067	870	4,041	1,396
	2005年	3,443	2,484	575	1,909	281	1,628	959	3,187	1,283
	2010年	3,197	2,197	657	1,540	226	1,314	1,000	2,690	1,224

農家数：農林業センサス
生産額：市町民経済計算。但し、平成22年はデータがないため、平成21年度速報値で代用。

４　暮らしの持続

(1) 目標値

評価指標	現状値	目標値		
		2020年	2030年	2050年
成果指標				
生活満足度	54% (2011年)	60%	70%	90%

持続人口 (定住人口＋交流人口)	18万1千人 (2010年) 定住:14万4千人 交流:3万7千人	17万5千人 定住:13万人 交流:4万5千人	17万3千人 定住:12万人 交流:5万3千人	18万1千人 定住:10万7千人 交流:7万4千人
取組指標				
出生者数	1,063人 (2009年)	1,000人／年	900人／年	900人／年
転入者数	3,100人 (2010年度)	4,000人／年	5,000人／年	4,600人／年
転出者数	3,800人 (2010年度)	3,700人／年	3,500人／年	3,200人／年
観光入込客数	12,178千人 (2009年度)	14,396千人	16,823千人	22,975千人
二地域居住者数	3,400人 (2010年)	6,800人	9,600人	14,500人

(2) 目標設定の考え方

〔成果指標〕

□生活満足度

・　「生活満足度」を評価指標に設定。この指標は暮らしの領域に止まらず、構想全体の成果を示す指標となる。なお、淡路島の現状値は、兵庫県が平成14年度から毎年実施している「美しい兵庫指標」県民意識調査の結果に基づくものである。

・　将来目標については、現在50%前後の淡路島民の生活満足度を、OECD加盟国中最高水準のデンマーク（90%）に近づけることとした。100%としなかったのは、不断の進歩のための原動力としてそれ以上に伸びる余地が必要と考えたためである。

（出典）OECD「より良い暮らし指標」。なお、同資料によれば、日本国民の生活満足度は40%とOECD加盟国平均の59%を大きく下回っている。

□持続人口（定住人口＋交流人口）

・　本構想では、地域の持続可能性を高める新たな人口概念として、「定住人口」と観光入込等の「交流人口」の2つの人口からなる「持続人口」を提案した。「持続人口」を長期的に維持することが目標となる。

・　定住人口が減少しても、それを補うだけの交流人口の増加があれば、地域の暮らし・産業は維持されるものと考える。定住人口の減少を抑制するため、出生率向上や雇用創出等による定住促進に取り組むものの、高齢化に伴う人口減少に歯止めをかけることは困難である。このため、定住人口の減少を補うだけの交流人口の増加を図ることにより、「持続人口」を維持することを目標とする。

〔取組指標〕

□出生者数・転入者数・転出者数

・　現在の趨勢が今後も変わらないとすると、低出生率による少子化と超高齢化に伴う自然減、若年世代を中心とした転出超過による社会減の結果、2010年の14万4千人が2050年には7万7千人（2010年比46%減）まで減少する見込みである。

（出典）兵庫県「兵庫県将来推計人口（平成20年5月）」

・　これに対して、今後、出生率が長期的に人口を維持できる出生率の目安である「人口置換水準（合計特殊出生率＝2.07）」まで上昇し、かつ、地域の魅力向上により社会移動が現在の転出超過から転入超過に転じるとして将来推計した結果を定住人口の目標値と設定した。

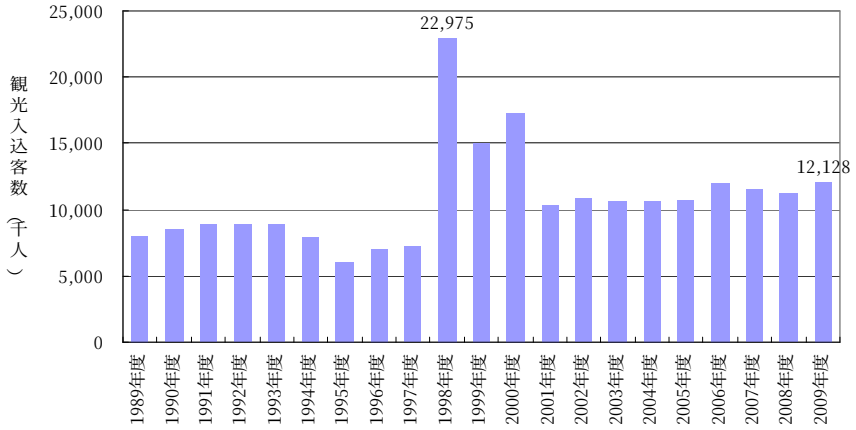
・　具体的には、出生率については、現在の淡路島の出生率（合計特殊出生率＝1.50）が今後一定の伸びで上昇し、2050年には人口置換水準（合計特殊出生率＝2.07）に達すると設定。
・　社会移動については､2050年に向けて徐々に転出者の減少と転入者の増加が進むものとし、今後15年で（2025年までに）転出超過が転入超過に転じ、今後30年で（2040年までに）現在の転出超過の人口規模と同程度の転入超過が実現する（－700名が＋700名に）と設定。
・　上記の設定に基づき「兵庫県将来推計人口（平成20年5月）」を改変して推計した結果は下表のとおり。この2020年、2030年、2050年時点の推計値を将来目標とした。

	2005年	2010年	2015年	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年	2045年	2050年
定住人口	151,400	143,300	136,200	129,800	124,300	119,600	115,400	111,500	108,500	106,600
期間中（過去5年間）の純増減	―	-8,100	-7,100	-6,400	-5,500	-4,700	-4,200	-3,900	-3,000	-1,800
純増減／年	―	-1,600	-1,400	-1,300	-1,100	-900	-800	-800	-600	-400
自然増減／年	―	-900	-1,000	-1,200	-1,200	-1,300	-1,400	-1,500	-1,500	-1,500
出生者数／年	―	1,100	1,000	900	800	800	800	800	900	900
死亡者数／年	―	2,000	2,000	2,100	2,100	2,000	2,200	2,300	2,300	2,400
社会増減／年	―	-700	-400	-100	100	300	500	700	900	1,100
転入者数／年	―	3,400	3,500	3,600	3,600	3,700	3,700	3,800	3,900	4,000
転出者数／年	―	4,100	3,900	3,700	3,500	3,300	3,200	3,100	3,000	2,900

□観光入込客数・二地域居住者数

・　交流人口は、観光入込客数、二地域居住者数、通勤･通学人口の3つで構成されるものとする。
・　観光入込客数については、2050年までに過去最高水準（明石海峡大橋が開通した平成10年の22,975千人）の入込客数を実現することを目標とした。（具体的には、2050年まで毎年観光入込客が前年比約1.6%増加するとして計算。）

淡路地域の観光入込客数の推移



・　二地域居住者数については、統計が存在しないため、国土交通省のアンケート調査結果に基づき、現在、定住人口の2.4%の二地域居住者がいるものと推定。同じ調査結果で、二地域居住を希望する者（今後二地域居住をしたいと思うと回答した者）が回答者の13.6%だったことから、2050年に定住人口の13.6%の二地域居住者数を実現することを目標に設定した。
（出典）国土交通省国土計画局「二地域居住等に関する調査結果」（平成20年5月）
・　通勤・通学人口については、島外に通勤・通学する島民（2005年定住人口比2.6%）と島内に通勤・通学する島外民（定住人口比1.8%）が2050年に共に定住人口比5%で出入りがバランスするものとした。
・　交流人口は定住人口に換算して表示。観光入込客のうち日帰り客は365分の1、宿泊客は365分の2、二地域居住者は7分の2（週のうち2日滞在）の定住人口に換算した（通勤・通学人口は1人の人口としてカウント。）。

【参考】エネルギー関連の目標設定の計算方法

１　計算の流れ

・　淡路島のエネルギー自給率＝淡路島内のエネルギー生産量／淡路島内のエネルギー消費量
・　まず、淡路島の現状のエネルギー創出量、消費量を既存の統計資料等から推計。
・　エネルギー創出の将来目標については、淡路島のポテンシャルから実現可能性があると見込まれる再生可能エネルギーによる発電事業を積み上げて設定。
・　エネルギー消費の将来目標については、部門別の取組目標（家庭・事業所でのエネルギー消費削減、環境対応自動車の普及）を設定し、その目標が達成された際のエネルギー消費量として設定。

２　エネルギー創出量の推計

(1) 現在

現在淡路島内で稼動している再生可能エネルギーによる発電事業等をリストアップし、その出力から年間想定発電量を試算。

① 風力発電

5箇所19基で出力計43,100kW。想定発電量75,511MWh／年。

② 太陽光発電

・　事業所64箇所で出力計2,076kW。想定発電量2,183MWh／年。
・　家庭1,550戸で出力計5,857kW。想定発電量6,157MWh／年。

【風力発電】　2010年3月現在

設置者	台数	1台当たり出力(kW)	出力(kW)	想定発電量(MWh/年)	所在地
淡路市	1	600	600	1,051	淡路市小倉
㈱クリーンエネルギー五色	1	1,500	1,500	2,628	洲本市五色町都志
㈱南淡風力エネルギー開発	1	1,500	1,500	2,628	南あわじ市阿万西町
㈱ホテルニューアワジ	1	2,000	2,000	3,504	南あわじ市阿万吹上町
CEF南あわじウィンドファーム㈱	15	2,500	37,500	65,700	南あわじ市阿那賀
計	19		43,100	75,511	

【太陽光(事業所)】　2010年3月現在

所在地	箇所数	出力(kW)	想定発電量(MWh/年)
洲本市	28	394	414
南あわじ市	19	434	456
淡路市	17	1,249	1,313
計	64	2,076	2,183

【太陽光(家庭)】　2009年12月現在

所在地	件数	出力(kW)	想定発電量(MWh/年)
洲本市	412	1,543	1,622
南あわじ市	676	2,599	2,732
淡路市	449	1,666	1,751
その他(所在地不詳)	13	49	52
計	1,550	5,857	6,157

（参考）廃食用油によるＢＤＦ精製

2箇所で能力計200l／日。年間のBDF精製実績21,623ℓ。

【廃食用油によるBDF精製】　平成23年8月現在

設置者	施設名	能力	所在地
洲本市	五色菜種搾油･BDF精製施設	100l/日	洲本市五色町都志
淡路市	岩屋エコプラザ	100l/日	淡路市岩屋

(2) 将来（実施が想定される事業）

＜発電事業種別の想定発電量＞

（単位：MWh／年）

	既設	今後実施が想定される事業			合計
		2011～30年	2031～50年	小計	
①風力発電	75,511	84,096	231,264	315,360	390,871
②太陽光発電	8,340	111,225	202,818	314,043	322,383
大規模太陽光発電所	2,183	53,611	121,098	174,709	176,892
事業所		18,048	22,191	40,239	40,239
避難所（庁舎･公民館等）		2,093	4,541	6,634	6,634
住宅	6,157	37,473	54,988	92,461	98,618
③太陽熱発電	0	2,104	4,208	6,312	6,312
④バイオマス発電	0	6,264	18,636	24,900	24,900
⑤潮流発電	0	26,280	26,280	52,560	52,560
⑥ごみ発電	0	10,000	10,000	20,000	20,000
⑦小水力発電	0	69	345	414	414
計	83,851	240,038	493,551	733,589	817,440

①　風力発電

2050 年までに出力計 168,000kW、想定発電量 315,360MWh／年を実現。

（内訳）

2011～2030年	2031～2050年
出力計48,000kW　想定発電量84,096MWh／年 ○淡路北部風力発電事業（仮称） 事業主体：関電エネルギー開発㈱ 出力：14,000kW（2,000kW×7基） 想定発電量：24,528MWh／年 ○淡路西部洋上風力発電事業（仮称） 出力：10,000kW（2,500kW×4基） 想定発電量：17,520MWh／年 ○五色風力発電事業 出力：20,000kW（2,000kW×12基） 想定発電量：42,048MWh／年	出力計120,000kW　想定発電量231,264MWh／年 ○洋上風力発電 出力：60,000kW（3,000kW×20基） 想定発電量：115,632MWh／年 ○陸上洋上風力 出力：60,000kW（3,000kW×20基） 想定発電量：115,632MWh／年

＊設備利用率を2011～30年は20%と想定（参考：NEDO「新エネルギーガイドブック2008」）。
2031～50年は技術革新により1割増（22%）になると仮定。

②　太陽光発電

2050 年までに出力計 271,671kW、想定発電量 314,043MWh／年を実現。

（内訳）

2011～2030年	2031～2050年
出力計97,685kW　想定発電量111,225MWh／年	出力計173,986kW　想定発電量202,818MWh／年
大規模太陽光発電所 出力計50,000kW　想定発電量53,611MWh／年	出力計120,000kW　想定発電量121,098MWh／年

○太平洋セメント土取り地 　出力：20,000kW 　想定発電量：21,024MWh／年（設備利用率12%） ○津名東生産団地 　出力：20,000kW 　想定発電量：21,024MWh／年（設備利用率12%） ○淡路市志筑新島 　事業主体：オリックスグループ 　出力：5,000kW 　想定発電量：5,256MWh／年（設備利用率12%） ○津名佐野地区産業用地（2021～30年） 　出力：5,000kW 　想定発電量：6,307MWh／年（設備利用率14.4%）	○20MW級2箇所 　出力：40,000kW 　想定発電量：60,549MWh／年 ○10 MW級4箇所 　出力：40,000kW 　想定発電量：60,549MWh／年
事業所 出力計14,787kW　想定発電量18,048MWh／年 従業者5人以上の民営事業所2,932事業所（2006年事業所・企業統計）の25%に相当する733事業所が太陽光発電設備を導入すると想定。 ＊1事業所当たりの出力を20kWとする。 ＊導入は加速度的に進むものとし、上記の2割は2011～20年に、残りの8割は2021～30年に導入されるものと想定。	出力計14,660kW　想定発電量22,191MWh／年 従業者5人以上の民営事業所2,932事業所（2006年事業所・企業統計）の50%に相当する1,466事業所が太陽光発電設備を導入すると想定。
避難所（庁舎・公民館等） 出力計1,810kW　想定発電量2,093MWh／年 庁舎や避難所指定されている公民館等のうち太陽光発電設備を未整備の箇所（181箇所）に太陽光発電設備を導入すると想定。 ＊1箇所当たりの出力を10kWとする。 ＊毎年一定数の施設に計画的に導入されると想定。	出力計3,000kW　想定発電量4,541MWh／年 県・淡路島3市及びそれらの外郭団体が管理する全ての施設に太陽光発電整備を導入すると想定。
住宅 出力計31,088kW　想定発電量37,473MWh／年 淡路島内の住宅総数51,440戸（居住世帯ありに限る。2008年住宅・土地統計）のうち「持ち家」38,780戸の25%に当たる9,695戸が太陽光発電設備を導入すると想定。（うち1,550戸は2008年10月1日時点で既設のため、8,145戸が新規導入する計算。） ＊1戸当たり出力を島内平均規模の3.78kWとする。 ＊導入は加速度的に進むものとし、上記の3割は2011～20年に、残りの7割は2021～30年に導入されるものと想定。	出力計36,326kW　想定発電量54,988MWh／年 淡路島内の住宅総数51,440戸（居住世帯ありに限る。2008年住宅・土地統計）のうち「持ち家」38,780戸の50%が太陽光発電設備を導入すると想定。

＊設備利用率を2011～20年は12%と想定。技術革新により2021～30年には2割増（14.4%）、2031～50年はさらに2割増（17.3%）になると仮定。

③　バイオマス発電

2050 年までに出力計 8,300kW、想定発電量 24,900MWh／年を実現。

・　兵庫県バイオマス総合利用計画（H17.1）によれば、淡路島内のバイオマスの利用可能量はドライ系21,729t/年、ウェット系608,556t/年、計630,285t/年と莫大な量があるが、収集コスト・設備コストの面からその有効活用は進んでいない。
・　このため、ドライ系バイオマス活用のモデル事業として、洲本市が、剪定枝、放置竹林を活用したバイオガス発電（想定発電量3,000MWh／年）に取り組む。
・　また、ウェット系バイオマス活用のモデル事業として、同じく洲本市が、下水汚泥等を活用したメタンガス発電（想定発電量90MWh／年）に取り組む。
・　将来的には、ドライ系バイオマスの利用可能量の50%程度を活用したバイオガス発電を実施するものと想定し、40t/日（年12,000t）の処理量で年間12,000MWhの発電量を見込む。
・　また、ウェット系バイオマスの利用可能量の5%程度を活用した発電事業を実施するものと想定し、100t/日（年30,000t）の処理量で年間12,900MWhの発電量を見込む。

2011～2020年	2021～30年	2031～2050年
出力計1,044kW　想定発電量3,132MWh／年 ○ドライ系資源の発電・液体化による貯蔵利用 発電量3,000MWh／年（1MW×10h×300日） 処理量3,000t／年（処理能力10t/日×300日） ○高速メタン発酵による発電・熱利用 発電量90MWh／年（30kW×10h×300日） 処理量2,100t／年（処理能力7t/日×300日） ○廃食用油利用のバイオ燃料高質化による農機燃料・発電利用 発電量42MWh／年（14kW×10h×300日） 処理量60t／年（0.2t/日×300日）	2011～20年の2倍程度の規模の発電施設が稼動。 出力計2,080kW 想定発電量6,240MWh／年	2011～20年の8倍程度の規模の発電施設が稼動。 出力計8,300kW 想定発電量24,900MWh／年

④　太陽熱発電

2050 年までに出力計 6,000kW、想定発電量 6,312MWh／年を実現。

・　太陽自動追尾を含む太陽熱集熱システム、高効率小型蒸気発電装置、バイナリー発電システムを組み合わせ、太陽光発電の2倍超の効率性を持つ太陽熱活用技術を開発し、島内に展開。
・　想定される発電装置の規模は、出力500kW、想定発電量526MWh／年。
・　2011～20年に開発、2021～30年で島内4箇所（出力2,000kW・想定発電量2,104MWh／年）、2031～50年で島内8箇所（出力4,000kW・想定発電量4,208MWh／年）に整備。

⑤　潮流発電

2050 年までに出力計 6,000kW、想定発電量 52,560MWh／年を実現。

・　2016年までに実験機（最大300kW×1基）で試験。年間発電量は2,628MWh（300kW×24時間×365日）を見込む。但し、研究施設構内（想定：神戸造船所）での試験である。

・　その後は、2020年までに実証機（出力1,000kW×1基；発電量8,760MWh／年）を設置し、さらに、2030年までに実機（出力3,000kW＝1,000kW×3基；発電量26,280MWh／年）を設置するものと想定。
・　さらに2031～2050年の間に技術革新による新たな発電事業の可能性を見込み、2011～30年の整備量と同等量の整備が行われるものと想定。

⑥　ごみ発電

2050 年までに出力計 3,000kW、想定発電量 20,000MWh／年を実現。

＜洲本市・南あわじ市の統合ごみ焼却施設におけるごみ発電＞
・　「南あわじ市清掃センター」の焼却施設が老朽化していることから、南あわじ市は2016年度末を目途にこれを更新したい意向。同センターは旧緑町域を除く南あわじ市域のごみ処理施設。洲本市域と旧緑町域のごみ処理施設として別に「やまなみ苑」がある。
・　現在、南あわじ市が洲本市、県（環境整備課）と協議しながら、「現地更新」と「やまなみ苑との統合」の2つの案を中心に、同センターの更新方法の検討を行っている。
・　焼却施設の更新に合わせて余熱利用によるごみ発電設備の導入も検討されている。
《施設概要》

	南あわじ市清掃センター	やまなみ苑
設置者	南あわじ市	洲本市・南あわじ市衛生事務組合
供用開始	1987年	1995年
所轄区域	旧緑町域を除く南あわじ市域	洲本市域及び旧緑町域
処理能力	60t/日（30t/日×2）	98t/日（49t/日×2）
余熱利用	なし	なし

・　ごみ発電設備は焼却施設の処理能力が高いほど効率的。ごみ発電設備の導入を前提とすると「やまなみ苑との統合」案が有力と考えられる。
・　やまなみ苑と統合してごみ発電設備を導入した場合、先行事例から、出力1,500kW、想定発電量10,000MWh／年程度の発電が可能と想定され。
《ごみ発電の先行事例》
施設名称：揖龍クリーンセンター（たつの市）（1997年4月より稼動）
焼却能力：120t/日（60t/日×2）　余熱利用：発電（定格出力1,375kW）
年間発電量：8,333MWh（発電効率11%・2011年度実績）＊電力は全て自家消費
・　2050年までに北淡路地域での新たな発電事業の可能性を見込み、2011～30年の整備量と同等の整備が行われるものと想定。

⑦　小水力発電

2050 年までに出力計 108kW、想定発電量 414MWh／年を実現。

・　2011～30年の間に鮎屋川ダムの放水路を活用した小規模水力発電事業を実施。農政環境部の調査結果によると、出力18kWで想定発電量は69MWh／年と見込まれる。
・　技術革新による新たな発電事業の可能性を見込み、2011～30年の整備量（1箇所）の5倍（5箇所）の整備が行われるものと想定（出力90kW・想定発電量345MWh／年）。

（参考）廃食用油によるＢＤＦ精製

2050 年までに 64,869ℓ（原油換算：64,220ℓ）の BDF 精製を実現。

・　現在、洲本市、淡路市は菜の花エコプロジェクトに取り組んでいる。遊休農地等への菜の花の植栽、家庭の廃食用油の回収、廃食用油によるBDF精製は年々拡大している。
・　家庭の廃食用油排出量の年間原単位を1ℓ/人とすると、島内で年間140,000ℓの廃食用油が家庭から排出されている。また、現在対象外の事業所の廃食用油も対象に含めると、2010年度実績33,256ℓの3倍増の100,000ℓ程度の回収は十分可能と考えられる。
・　2010年度のBDF精製実績21,623ℓ（原油換算：21,407ℓ，電力換算：84MWh）の3倍増の64,869ℓ（原油換算：64,220ℓ，電力換算253MWh）を2050年までに達成すると想定。
・　なお、精製したBDFはすべて市公用車で軽油代替燃料として使用されるものと想定。

	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度
菜の花植栽面積	10ha	20ha	30ha	30ha	45ha
廃食用油回収量（年間）	13,292ℓ	20,167ℓ	22,496ℓ	28,404ℓ	33,256ℓ
BDF精製量（年間）	9,229ℓ	12,830ℓ	19,250ℓ	14,000ℓ	21,623ℓ

＊精製方法：洲本市、淡路市のBDF精製施設（処理能力100ℓ/日）にて精製

＜原油換算根拠（省エネ法施行規則）軽油1kℓ=原油0.99kℓ，電力1kWh=原油0.254ℓ＞

３　エネルギー消費量の推計

(1) 現在

・　我が国には、市町村別のエネルギー消費量を示す統計が存在しないため、資源エネルギー庁「都道府県別エネルギー消費統計」おける2008年度の兵庫県の値をもとに、資源エネルギー庁「市町村別エネルギー消費統計作成のためのガイドライン（H18.6）」に基づく按分計算により淡路島3市の2008年度のエネルギー消費量を推計。
・　推計作業は、上記ガイドラインに沿って、産業（製造業）、産業（非製造業）、民生（家庭）、民生（業務）、運輸の5部門別に実施。

（2008年度の淡路地域のエネルギー消費量（単位：TJ）推計結果）

	産業			民生		運輸	計
		製造業	非製造業	家庭	業務		
兵庫県	361,443	346,923	14,519	87,553	99,332	42,650	590,978
淡路地域	6,650	5,824	826	1,932	2,386	1,830	12,798
洲本市	3,312	3,119	193	643	809	566	5,329
南あわじ市	1,740	1,387	353	607	881	735	3,962
淡路市	1,599	1,319	280	683	696	529	3,507

（部門別のエネルギー消費量の推計方法）

項目	推計方法
産業 （製造業）	・県全体での製造業の消費量を「工業統計」の「製造品出荷額等」で按分 【出典】製造品出荷額等：経済産業省「平成20年工業統計調査」
産業 （非製造業）	・「農林水産業」と「建設業・鉱業」の2部門に分類。県全体での各部門の消費量を就業者数で按分 【出典】農林業就業者数：農林水産省「2010年世界農林業センサス」，漁業就業者数：農林水産省「2008年漁業センサス」，建設業・鉱業就業者数：総務省「平成18年事業所・企業統計調査」

民生（家庭）	石油製品	・軽質油製品（軽油）の県全体の消費量を世帯数で按分 【出典】世帯数：総務省「平成22年国勢調査」速報値 ・石油ガス（プロパンガス）の県全体の消費量をLPガス需要戸数で按分 【出典】LPガス需要戸数：兵庫県プロパンガス協会資料（H20.8）
	都市ガス	・県全体での消費量を県内都市ガス販売熱量のうち洲本瓦斯株式会社の販売熱量の占める比率で按分 【出典】都市ガス販売熱量：兵庫県統計書（平成20年）表15.8「都市ガス生産・販売状況」
	電力	・県全体での消費量を世帯数で按分 【出典】世帯数：総務省「平成22年国勢調査」速報値
	熱供給	・県全体での消費量を世帯数で按分 【出典】世帯数：総務省「平成22年国勢調査」速報値
民生（業務）	石炭・石炭製品・石油製品	・県全体での消費量を業務系建物床面積で按分 【出典】業務系建物床面積：総務省「固定資産の価格等の概要調書」（平成22年1月1日時点）
	都市ガス	・県全体での消費量を県内都市ガス販売熱量のうち洲本瓦斯株式会社の販売熱量の占める比率で按分 【出典】都市ガス販売熱量：兵庫県統計書（平成20年）表15.8「都市ガス生産・販売状況」
	電力	・県全体での消費量を業務系建物床面積で按分 【出典】業務系建物床面積：総務省「固定資産の価格等の概要調書」（平成22年1月1日時点）
	熱供給	・県全体での消費量を業務系建物床面積で按分 【出典】業務系建物床面積：総務省「固定資産の価格等の概要調書」（平成22年1月1日時点）
運輸		・県全体での消費量を自動車台数で按分 【出典】兵庫県統計書（平成20年）表14.5 「市区町別自動車台数」

(2) 将来

・　産業（製造業）、産業（非製造業）、民生（家庭）、民生（業務）の4部門については、2008年度のエネルギー消費量を出発点とし、2020年、2030年、2050年の各時点の需要家数と需要家1単位当たりエネルギー消費量の各増減率を乗ずることで算出。

・　残る1部門の運輸については、2008年度のエネルギー消費量を出発点とし、2020年、2030年、2050年の各時点の自動車台数の増減率を設定するところまでは上記4部門と同じ計算方法だが、①環境対応自動車（推計上は電気自動車とした。）の普及率に加え、②燃費向上及び車両の小型化・パーソナル化の効果、③脱クルマの取組による自動車交通量の削減効果の2要素を加味し、将来のエネルギー消費量を推計。

項目	推計方法
産業（製造業） 産業（非製造業） 民生（家庭） 民生（業務）	・需要家数：持続人口（定住人口＋交流人口）の将来の増減率で代替。 ・需要家1単位当たりエネルギー消費量の増減率について、環境省等の資料を参考にして、実現可能性があると考えられる水準（2020年15%削減、2030年30%削減、2050年50%削減）を努力目標として設定。

【参考資料】

・環境省「地球温暖化対策に係る中長期ロードマップ」（H22.3）によれば、2020年の温室効果ガス排出量1990年比25%削減に必要な各部門の温室効果ガス排出削減率は民生（家庭）で1990年比48～53%、民生（業務）で43～48%となっている。

・全国地球温暖化防止活動推進センターHPによれば、平成20年度に「うちエコ診断」を実施した家庭の1年後のCO2削減量は460kg／戸（97世帯で44,600kg：地球環境戦略研究機関（IGES）関西センターが実施したアンケート調査結果）。家庭のCO2排出量は4,852kgCO2／世帯（2009年度）であることから、「うちエコ診断」の実施により各家庭で10%程度のCO2排出量削減効果があることがわかる。

運輸

・自動車台数：持続人口（定住人口＋交流人口）の将来の増減率で代替。

・政府目標を参考に環境対応自動車（推計上は電気自動車とした。）の普及率を設定。
2020年20%、2030年40%、2050年90%
なお、ガソリン車1台を電気自動車にした際のエネルギー消費削減率は32%と設定。

【参考：経済産業省「次世代自動車戦略2010」（H22.4）】

乗用車車種別普及目標（政府目標）

車種	2020年	2030年
従来車	50～80%	30～50%
次世代自動車	**20～50%**	**50～70%**
ハイブリッド自動車	20～30%	30～40%
電気自動車 ﾌﾟﾗｸﾞｲﾝ・ﾊｲﾌﾞﾘｯﾄﾞ車	15～20%	20～30%
燃料電池自動車	～1%	～3%
ｸﾘｰﾝﾃﾞｨｰｾﾞﾙ自動車	～5%	5～10%

・燃費向上及び車両の小型化・パーソナル化によるエネルギー消費削減率を設定。
2020年5%、2030年10%、2050年20%

・脱クルマの取組による自動車交通量の削減に伴うエネルギー消費削減率を設定。
2020年5%、2030年10%、2050年20%

【参考：電気自動車の導入によるエネルギー消費削減効果の試算】

○すべてガソリン車の場合

・島内に100台の自動車があり、1台当たり平均走行距離は20km/日とする。自動車100台の年間延べ走行距離は730,000km。

・すべてガソリン車で平均燃費が16km/ℓとすると、自動車100台の延べ走行距離730,000kmに要するガソリン量は45,625ℓ（原油換算40,606ℓ）。

○半分を電気自動車にした場合

・自動車100台の半分が電気自動車になったとする。1台当たりの平均走行距離は20km/日で変化しないものとする。ガソリン車50台の年間延べ走行距離365,000kmに要するガソリン量は22,813ℓ（原油換算20,303ℓ）。

・電気自動車は24kWhの電池を搭載し、満充電の走行距離が160kmとする。このとき燃費は6.67km/kWh。電気自動車50台の延べ走行距離365,000kmに要する電力量は54,723kWh。この電力量を原油換算すると13,900ℓ。

・ガソリン車50台と電気自動車50台が使用するエネルギー量の計は原油換算36,713ℓとなり、すべてガソリン車の場合に使用するエネルギー量の84.2%となる。

・なお、以上の計算結果によると、ガソリン車1台のエネルギー消費量を1とした場合の電動自動車のエネルギー消費量は0.6846（32%削減）となる。＜原油換算根拠（省エネ法施行規則）ガソリン1kℓ=原油0.89kℓ，電力1kWh=原油0.254ℓ＞

あわじ環境未来島構想推進協議会の協議の概要

地域協議会の名称	あわじ環境未来島構想推進協議会
地域協議会の設置日	平成23年９月21日
地域協議会の構成員	別表のとおり
協議を行った日	①　平成23年６月28日 第１回あわじ環境未来島構想推進協議会設立準備会合 （準備会合には、協議会の企画委員会構成員候補者に参集いただいた。） ②　平成23年８月11日 第２回あわじ環境未来島構想推進協議会設立準備会合 ③　平成23年９月21日 第１回あわじ環境未来島構想推進協議会 （台風15号災害により延期せざるを得ず、９月21日～27日に意見聴取。）
協議の方法	①　会議を開催（会場：兵庫県立淡路夢舞台国際会議場） ②　会議を開催（会場：兵庫県立淡路夢舞台国際会議場） ③　会議の開催を予定していたが、台風15号に伴う豪雨により、島内の一部で土砂崩れ、冠水等による交通寸断等が発生し、やむなく延期。日程を再調整中。 なお、協議予定だった申請書案を全構成員に送付し、意見を求めた。
協議会の意見の概要	①　第１回あわじ環境未来島構想推進協議会設立準備会合 （地域挙げての取組姿勢の明確化） 1　構想としてはまとまってきたが、これを実際に推進するのは難しい。強固に担保して進めるため、県も３市も構想推進の条例を作って臨んでいくことが求められる。 （地域の課題に即した将来像の必要性） 2　構想の目指す姿と淡路地域ビジョンとの摺り合わせについて納得いかない部分がある。 3　エネルギーが前面に出ているがそれが本当に目指す姿か。沼島を例にとっても、超高齢化が進んでおり、エネルギー自給よりも生活自体の持続が問題。そうした問題とエネルギーを掛け合わせてどう表現するかが大事。五色でも同様。 4　個々の取り組みはよいが、手段中心の印象。全体としてどうなっていくのか、どうやって地域の問題を解決していくのかの書き込みが足りない。 5　技術を並べるだけでなく、いろいろな技術を島民の暮らしにどう生かすかをしっかり書く必要がある。過疎で大変な地域の再生モデルということを前面に出して、他の地域が真似できないような提案をしないといけない。

	（域外の主体と域内の連携） 6　大きな企業が実施主体として書かれているが、住民がもっと主体になってやるためにはどうすればよいかを考えることが必要。 7　島外の企業の技術を活用して構想を展開していく流れで書かれているが、地元にも一定の利益が還元される形で推進される必要がある。島の利益につながる形で外部の技術を導入するシステムを考えないといけない。 （適切な評価） 8　数値目標を定めて、評価委員会を作って評価していくべき。 ②　第２回あわじ環境未来島構想推進協議会設立準備会合 （新たな地域像や価値提示の必要性） 9　去年の段階では、2020年20万人、2050年30万人という人口目標が示され、これと合わせて明石海峡大橋の無料化・低廉化が提起されていたが、現在の案では、人口は現状維持という現実的な目標になり、明石海峡大橋の記述が消えている。橋の問題をきちんと書き込み、全島挙げてこれに取り組むという意思表示をすべき。 10　淡路の豊かさは橋の料金だけで決まるものではない。橋の問題以前に、どういう地域をつくるのかを議論することが大切。 11　人口や施設が多いことだけで本当に人々は幸せになれるのか。日本社会全体の問題として、今までの価値観とは違うあり方を求められているはず。今ある地域の良さをどう生かし、今ある資源を分かち合ってどういう地域をつくっていくのかが問題だ。 12　色々なメニューが並んでいるが、全体でどういう循環が起こるのかが見えにくい。社会システムとしてどう機能させていくか。起爆剤があって、こういう好循環が起こっていくというストーリーの組み立てが必要。 （山・川・海の連携） 13　漁業をもっと取り入れないといけない。農業でも漁業でも採算性がとれ、我々の暮らしが成り立つというのが目指す姿のはず。 14　エネルギーも大事だが、山・川・海の循環を取り戻すことも重要。砂浜と小川と里山を再生するという提案が、いつの間にか資料から消えている。これは、景観だけの問題ではなく、漁業の再生にとって大きな課題。 （小水力の活用） 15　風力・太陽光の話が最近よく出てくるが、淡路島に無数にあるため池を使った小水力発電をもっと検討すべきではないか。同じエネルギーでも淡路らしさが出るはず。 （健康づくり）

	16　経済成長に伴い、夜型生活・飽食・生活習慣病の連鎖は避けられないし、逆戻りするのも困難。そのためにも日頃からの健康教育が重要。構想の中でもっと健康を打ち出すことができないか。 （人づくり） 17　2030年が一つの目安になっているが、その時代を支える子どもたちにこの構想をどう浸透させていくかも考える必要がある。 （景観） 18　太陽光発電の必要性は理解できるが、いかに地域の街並み景観と調和させていくかをきちんと考えないといけない。淡路らしさを表す瓦屋根の家並みと太陽光発電パネルがどう折り合うのか、構想でやろうとしていることがどういう地域景観を作っていくのかという視点を持つことが重要。 ③　第１回あわじ環境未来島構想推進協議会（文書による意見聴取） （将来像） 19　冒頭の「命つながる…」の表現は、「生命つながる…」の表現にした方が後に続くビジョンとのイメージが繋がりやすい。 （本土と島の交通） 20　現在、明石海峡大橋は車しか通行できないが、人、自転車、125cc以下のバイクも通行できるように申請書に記載し、実現を目指すこと。 （水産業） 21　電動漁船、ハイブリッド漁船など、エコ漁業の取り組みは重要。ただ、電気で推進するだけでは漁船としては不十分。どのような漁船性能が求められるのか、水産サイドからの十分な検証が必要。
意見に対する対応	①　第１回あわじ環境未来島構想推進協議会設立準備会合 （地域挙げての取組姿勢の明確化） 1　当該発言者が条例素案を作成し、第２回準備会合で提示。十分な議論の時間が取れなかったことから、協議会正式発足後の検討課題としている。 （地域の課題に即した将来像の必要性） 2　現在、策定から10年を経過した「淡路地域ビジョン」の改定作業が行われている。指定申請書の定性的な目標について、淡路地域ビジョン委員会（100名余りの住民で構成）がまとめた改定案との整合を図った。 3　エネルギーへの取組が暮らしの質や持続性を高める結果になるように、地域との意見交換を重ねながら事業内容を検討している。例えば沼島では、地元漁協・自治会と話し合いながら、エネルギー自立を地域のなりわいである漁業、観光の活性化につなげる方策を検討している。

	４及び５　事業実施が地域の課題解決につながる先導的な位置づけを持つことがわかるように記述を充実した。 （域外の主体と域内の連携） ６　今後事業主体となる可能性のある住民グループのＮＰＯ化を支援するなど、住民が実際の担い手になるよう促している。 ７　外部の技術の導入から地域に利益を還元する仕組みとして、地域資源を生かしたエネルギー創出事業を住民出資で実施する「あわじ環境市民ファンドの創設」を主要な事業として盛り込んだ。 （適切な評価） ８　意見を踏まえ、毎年評価を行うことを前提に、数値目標について、平成22年９月の総合特区提案で示した内容をベースに、実現可能性の観点から詳細に検討し直した。人口については、拡大させるという従来の発想から、定住人口と交流人口を合わせて定常化を目指すという成熟社会にふさわしい発想に切り換え、これに対応する数値目標を設定した。 ②　第２回あわじ環境未来島構想推進協議会設立準備会合 （新たな地域像や価値提示の必要性） ９及び10　島民の間でも議論の分かれるポイントである。橋の無料化・低廉化については中国・四国の関係自治体と共同で取り組む問題であるため、指定申請とは分けて議論することとし、申請書には記載しない。引き続き協議会などの場で議論していく。 11　指定申請書の目標に、豊かさを分かち合いながら、身の丈に合った幸せを実感できる社会を目指すことを明記するとともに、この趣旨に合った評価指標として「持続人口」と「生活満足度（幸福度）」を設定。持続人口（定住人口＋交流人口）は今回新たな人口概念として提案するもの。定住人口の減少を補うだけの交流人口の増加を図ることにより地域の持続性を高めることを目標とした。 12　指定申請書の「政策課題間の関連性」で取組相互の関連性を示した。なお、構想全体を提示する「環境未来都市提案」の中でより詳しく全体の関連性を示している。 （山・川・海の連携） 13　漁業は沼島でのハイブリッド漁船の実証に加え、五色で海苔養殖船の完全電動化の実証を行うこととした。本申請には盛り込んでいないが、沼島ではハイブリッド漁船の実証と合わせて、エコツーリズムと組み合わせた漁業振興の取組を検討しており、「環境未来都市提案」には記載している。 14　既に漁業者による植樹や池干しなど里山再生の取組が進められつつあ

	る。本申請に位置づけるのは困難だが、さらにどのような取組が必要か、どのような形で事業化をしていくかを引き続き検討する。 （小水力の活用） 15　小水力発電は島内河川２箇所で検討中だが、一定の流量がないと事業性が見込めないことから、淡路島に多い小規模のため池での実施は困難と考えられるが、適地の有無や技術面からの可能性について引き続き検討する。 （健康づくり） 16　既に洲本市を中心に取組が始まっている「いきいき百歳体操」の普及が主な事業となる。本申請に位置づけるのは困難であるが、「環境未来都市提案」における「健康長寿島づくり（７つのセラピーによる健康の島づくり）」の中に意見の趣旨を取り込む。 （人づくり） 17　既に「環境未来島エコキッズ育成事業」を開始している。本申請に位置づけるのは困難であるが、「環境未来都市提案」における『「あわじ環境未来島」島民率先行動の推進』の中に意見の趣旨を取り込む。 （景観） 18　本申請に位置づけるのは困難であるが、「環境未来都市提案」における「淡路島景観づくり運動の推進」の中に意見の趣旨を取り込む。なお、瓦屋根一体型の薄膜式の太陽光発電システムの検討は現に行っている。 ③　第１回あわじ環境未来島構想推進協議会（文書による意見聴取） （将来像） 19　意見のとおりに修正した。 （本土と島の交通） 20　既に、兵庫県が本州四国連絡高速道路㈱の協力を得て、「明石海峡大橋有効利用検討調査」として道路下部の空間を利用した人、自転車、125cc以下のバイクの通行可能性の検討を進めている。 （水産業） 21　沼島、五色とも地元漁協の協力を得て事業を進めている。（独法）水産大学校等との連携を今後検討する。

（別表）

あわじ環境未来島構想推進協議会構成団体

１　協議会構成団体

会　長：瀧川好美氏（(財)淡路島くにうみ協会理事長）

副会長：知事、島内３市長、幡井政子氏（「環境立島淡路」島民会議会長)、木田 薫氏（淡路地域ビジョン委員会委員長）

	団　体　名	団体数
地方公共団体	兵庫県、洲本市、南あわじ市、淡路市	4
事業を実施し、又は実施すると見込まれる者	(財)淡路島くにうみ協会、(財)ひょうご環境創造協会、(財)五色ふるさと振興公社、リマテック(株)、浜田化学(株)、Bio-energy(株)、ヤンマー(株)、(株)神戸製鋼所、三菱重工業(株)、国際航業(株)、エナジーバンクジャパン(株)、(株)スマートエナジー、オリックス(株)、(株)三井住友銀行、(株)みなと銀行、淡路信用金庫、淡陽信用組合、淡路日の出農業協同組合、あわじ島農業協同組合、(株)パソナグループ、兵庫県線香協同組合、(株)カワムラサイクル、トヨタ自動車(株)、三洋電機(株)、関西電力(株)、五色漁業協同組合、沼島漁業協同組合、アイティオー(株)、(株)ＮＴＴデータカスタマサービス(株)、古野電気(株)、神戸大学、京都大学、大阪大学、大阪府立大学、大阪市立大学、東京大学、東洋大学、香港中文大学中医薬研究所	38
事業の実施に密接な関係を有する者	淡路広域行政事務組合、「環境立島淡路」島民会議、第５期淡路地域ビジョン委員会、淡路地区連合自治会、南あわじ市連合婦人会、淡路市婦人会、淡路消費者団体連絡協議会、淡路ブロックいずみ会連絡協議会、淡路ブロック老人クラブ連絡協議会、(社)淡路青年会議所、淡路環境美化月間・淡路全島一斉清掃推進協議会、あわじ菜の花エコプロジェクト推進会議、(公財)兵庫県青少年本部淡路青少年本部、淡路ブロック子ども会連絡協議会、淡路島観光協会、洲本商工会議所、五色町商工会、南あわじ市商工会、淡路市商工会、淡路医師会、食のブランド「淡路島」推進協議会、(社)淡路水交会、淡路島酪農農業協同組合、淡路畜産農業協同組合連合会、淡路花卉組合連合会、淡路地域農業経営士会、淡路地域青年農業士会、淡路地域女性農漁業士会、淡路地区漁協女性部連合会、北淡路地域ブランド推進協議会、(社)兵庫県建築士会淡路支部、第１期・第２期淡路地域ビジョン委員会、第３期・第４期淡路地域ビジョン委員会、伊弉諾神宮、淡路地方史研究会、NPO法人キッズアイランド淡路島、NPO法人淡路島アートセンター、NPO法人あわじFANクラブ、NPO法人淡路島活性化推進委員会、NPO法人淡路島環境整備機構、NPO法人低炭素未来都市づくりフォーラム、(株)夢舞台	42
計		84

２　アドバイザー

氏　　名	職　　名
安　藤　忠　雄	建築家、東京大学名誉教授、東日本大震災復興構想会議議長代理
加　古　敏　之	神戸大学名誉教授
嘉　田　良　平	総合地球環境学研究所教授、横浜国立大学大学院教授

加　藤　恵　正	兵庫県立大学政策科学研究所長
北　村　新　三	神戸大学名誉教授、県立工業技術センター所長
齊　木　崇　人	神戸芸術工科大学長
手　塚　哲　央	京都大学大学院教授
中　瀬　　勲	兵庫県立大学自然・環境科学研究所教授、兵庫県立人と自然の博物館副館長
松　田　　学	NPO法人食をプロデュースする淡路島顧問、埼玉学園大学客員教授
蓑　　豊	兵庫県立美術館長
森　栗　茂　一	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授
山　崎　養　世	(一社)太陽経済の会代表理事
鷲　尾　圭　司	(独法)水産大学校理事長
計	13人

４　企画委員会構成員

委員長：中瀬 勲、副委員長：北村新三

	氏　名	職　名
学識者	中　瀬　　勲	兵庫県立大学自然・環境科学研究所教授、兵庫県立人と自然の博物館副館長
	北　村　新　三	神戸大学名誉教授、県立工業技術センター所長
	手　塚　哲　央	京都大学大学院教授
	加　古　敏　之	神戸大学名誉教授
	森　栗　茂　一	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授
地域	小　畠　　寛	(財)淡路島くにうみ協会副理事長
	幡　井　政　子	「環境立島淡路」島民会議会長
	磯　崎　泰　博	第１期・第２期淡路地域ビジョン委員会委員長
	木　村　幸　一	第３期・第４期淡路地域ビジョン委員会委員長
	木　田　　薫	第５期淡路地域ビジョン委員会委員長
	平　木　勝　昭	淡路地区連合自治会長
	本　名　孝　至	伊弉諾神宮宮司
	武　田　信　一	淡路地方史研究会長
	木　下　紘　一	洲本商工会議所会頭
	木　下　紘　一	淡路島観光協会長
	志　智　宣　夫	南あわじ市商工会会長
	西　　啓次郎	淡路市商工会会長
	山　本　道　雄	五色町商工会会長
	明　石　善　久	淡路医師会会長
	石　田　　正	淡路日の出農業協同組合代表理事組合長
	倉　本　満　之	あわじ島農業協同組合代表理事組合長
	前　田　吉　計	(社)淡路水交会長
市	竹　内　通　弘	洲本市長
	中　田　勝　久	南あわじ市長
	門　　康　彦	淡路市長
県	藤　原　道　生	兵庫県淡路県民局長
	高　井　芳　朗	兵庫県政策監
計		27人

５　部会参加団体

五色部会責任者：渡邉浩史（洲本市農林水産部次長）、沼島部会責任者：中田眞一郎（南あわじ市市長公室長）、野島部会責任者：土井五郎（淡路市企画部次長）、住民出資型太陽光発電導入方策検討部会責任者：野邑奉弘（大阪市立大学大学院名誉教授）

	団　　体　　名	人数
五色部会	洲本市、兵庫県淡路県民局、兵庫県立工業技術センター、兵庫県立福祉のまちづくり研究所、兵庫県企画県民部、洲本市連合町内会都志地区、洲本市連合町内会鮎原地区、洲本市五色町鮎原神陽台町内会、洲本市連合町内会鳥飼地区、淡路日の出農業協同組合、五色漁業協同組合、五色町商工会、ソフトバンクモバイル(株)、国際航業(株)、東光電気(株)、エナジーバンクジャパン(株)、浜田化学(株)、Bio-energy(株)、ヤンマー(株)、リマテック(株)、(株)カワムラサイクル、トヨタ自動車(株)、三洋電機(株)、ツネイシホールディングス(株)、淡陽自動車教習所、アイティオー(株)、(財)五色ふるさと振興公社、ＮＴＴデータカスタマサービス(株)、(財)ひょうご環境創造協会、五色地域包括支援センター、洲本市社会福祉協議会、NPO法人低炭素未来都市づくりフォーラム、京都大学大学院エネルギー科学研究科エネルギー経済研究室、神戸大学、東洋大学、大阪府立大学	36
沼島部会	南あわじ市、兵庫県淡路県民局、兵庫県立工業技術センター、兵庫県立福祉のまちづくり研究所、兵庫県企画県民部、沼島総合開発会、沼島連合自治会、沼島漁業協同組合、(株)カネカ、慧通信技術工業(株)、(株)神戸製鋼所、古野電気(株)、ぬぼこの会、NPO法人低炭素未来都市づくりフォーラム、京都大学大学院エネルギー科学研究科エネルギー経済研究室、大阪市立大学	16
野島部会	淡路市、兵庫県淡路県民局、兵庫県立淡路景観園芸学校、兵庫県企画県民部、兵庫県立工業技術センター、淡路市野島連合町内会、スポーツクラブ21、野島地区農業者代表、淡路日の出農業協同組合、兵庫県線香協同組合、(株)パソナグループ、NPO法人低炭素未来都市づくりフォーラム、神戸大学連携創造本部	13
住民出資型太陽光発電導入方策検討部会	大阪市立大学大学院、淡路消費者団体連絡協議会、淡路島デザイン会議、兵庫県企画県民部、兵庫県農政環境部、兵庫県淡路県民局県民生活室、兵庫県淡路県民局公園島企画室、洲本市、南あわじ市、淡路市、(財)淡路島くにうみ協会、(株)三井住友銀行、(株)みなと銀行、淡路信用金庫、淡陽信用組合、淡路日の出農業協同組合、あわじ島農業協同組合、エナジーバンクジャパン(株)、オリックス(株)、(株)スマートエナジー	20

過去と未来、成長と持続をつなぐ淡路島の自然と文化

古代国生みの神話　沼島　上立神岩

２月黒岩水仙峡（遠方は沼島）

４月の北部丘陵

21 世紀の国づくり　明石海峡大橋

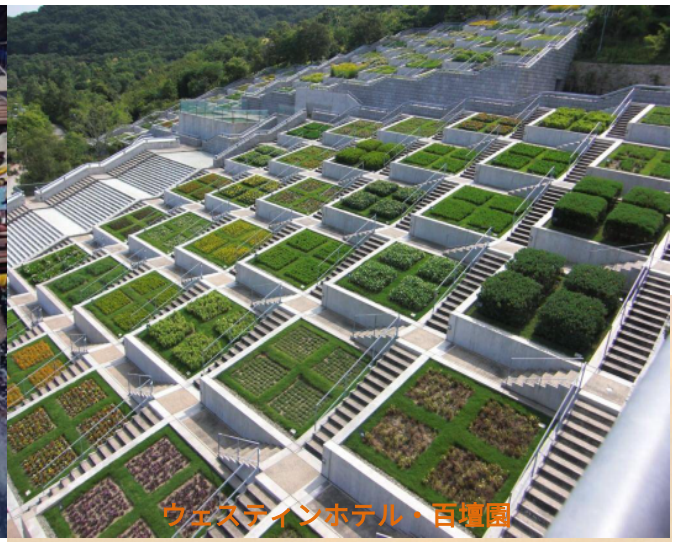
自然の美しさが残る島

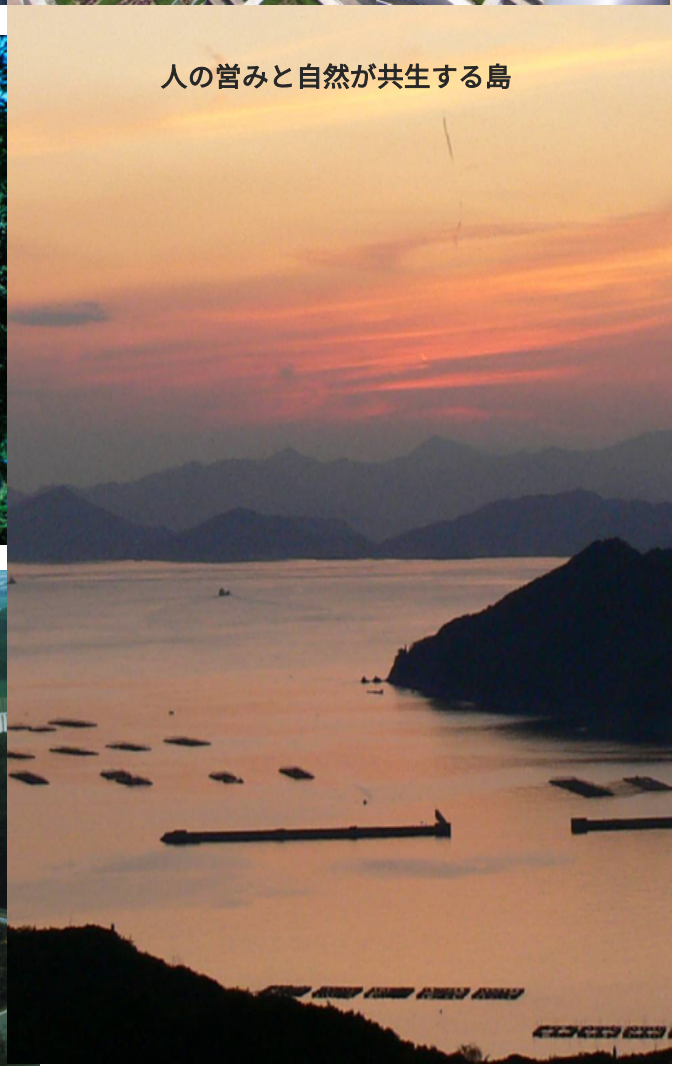
四季の移ろいが感じられる島

洲本市五色海岸

淡路人形浄瑠璃

豊漁を祈る檀尻の海入り


ウェスティンホテル・百壇園


人の営みと自然が共生する島

あわじ環境未来島シンポジウム
-国生みの島からの日本再生-

国生みの島である淡路島を全国の地域再生のモデルとすべく、島内３市とともに「あわじ環境未来島構想」をまとめ、平成２２年９月２１日に国の総合特区制度に提案を行いました。
本構想の充実・具体化を進めるため、幅広い視点から議論し内容を掘り下げる場として、シンポジウムを開催しました。

自分で考える。
みんなで考える。
未来のくらし。

テシゴトノオト handworks sounds

淡路島の手仕事をする人々に焦点を当て、手仕事をする時の音の面白さに特に注目し、写真、映像、音により表現された作品。

あわじ環境未来島シンポジウム
-国生みの島からの日本再生-

日時：平成２２年１２月１６日（木）
１３時開場・１３時３０分開演
場所：兵庫県立淡路夢舞台国際会議場

ビデオ上映「テシゴトノオト handworks sounds」 茂木綾子 / ヴェルナー・ペンツェル 2

開会の挨拶 兵庫県知事 井戸敏三 4

基調講演

「21 世紀の国生み・淡路島の挑戦」
安藤忠雄 6

意見発表

「故郷は　近くにありてこそ　なお強く想うべきもの・・・
木・土・紙・石の家プロジェクトからはじまる新国生み神話」
道上大輔 9

「全島まるごとミュージアムに向けて」
やまぐちくにこ 11

徹底討論

「日本の未来・淡路島の可能性」
モデレーター 中瀬　勲
パネラー 赤松清子
嘉田良平
齊木崇人
南部靖之
蓑　豊 14

閉会の挨拶 淡路県民局長 長棟健二 28

開会の挨拶

兵庫県知事　井戸敏三

皆さんこんにちは。

淡路島を先頭に押し立てて明日の日本を変えようというのがあわじ環境未来島構想の基本です。なぜ淡路島なのか。それは決まっています。おのころ島だからです。日本列島で最初に生み出された島が淡路島。だから日本を変えるとしたら最初の島が先頭に立つ。おまけに淡路島は条件がたくさん揃っています。1つは人口が少ない。増やせる可能性がある。また、神戸から数キロしか離れていないのになかなか神戸並になっていない。一方で、兵庫県内で食糧が自給できる島は淡路島しかない。それだったら、エネルギーだって自給しよう。ちょっと難しいのですが、水だって自給しよう。そして大勢の人達が訪れるような、高齢者から子どもまで充実した生活が営まれるような空間にしていこう。この方向づけを目指して、地域の人達と一緒に頑張っていこうというのがこの淡路島を未来島にしようという一番の基本です。

先ほど山崎養世先生から「兵庫県、淡路島が全然盛り上がってないじゃないか、盛り上がるだけの熱意を示さないと、傍からいくら応援したくたって応援できないぞ。」こういう風に指摘を受けました。安藤先生にも「地元が盛り上がって動いていかないのだったらさっさと逃げ出すしかなくなるぞ。」と言われてしまいました。我々は秘めたる情熱といざという時にスタートをきるためのエネルギーを貯めて準備をしていますが、どうもまだ外には見えていないらしい。それなら少し外に見えるような事をしなくてはいけないのではないかということで、そのキックオフ、スタートを切ろうとしたのがこのシンポジウムです。だからここにお集まりいただいた皆様には、すべて淡路島を未来島にする運動の担い手になっていただきたいと思います。

ここにお集まりの人が10人に声がけするとしたら300人で3,000人になる、その人達がまた10人にかければ30,000人になる、その人達がまた10人に声をかければ300,000人になる。一人ひとりが連携の輪を広げ、淡路島を夢の島にしようではありませんか、未来の日本のモデルにしていこうではありませんか。

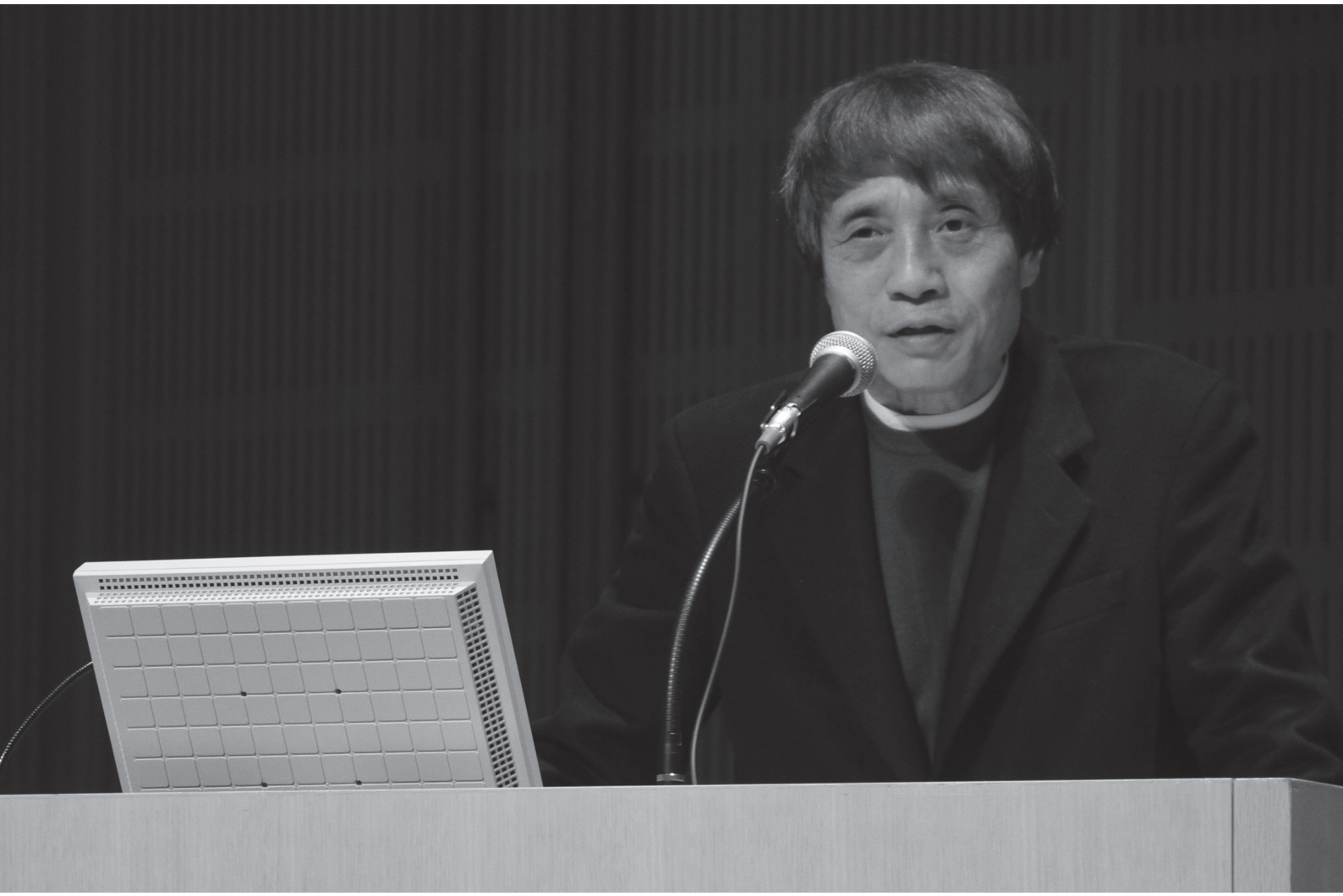
そのような意味で、今日のシンポジウムがそのスタートだった、あのときのシンポジウムから始まったなあと言えるようにしていきたいと思います。安藤先生から講演をいただきます。そして既に先駆的な活動をされているお二人から報告をいただきます。それらを受けてそれぞれの専門家のみなさんによるパネルディスカッションです。聞き流すだけはダメです。聞き流すようなシンポジウムだったら帰っていただいたほうがいい。聞いたからには必ず実行に結びつけるよう、皆さんと一緒に努力をしていこうではありませんか。

これから「淡路島を未来島に」という活動がスタートすることを決意表明し、私の挨拶とさせていただきます。頑張りましょう。

エントランス展示作品　茂木綾子（写真家・映像作家）

基調講演 「21世紀の国生み・淡路島の挑戦」

安藤忠雄 建築家・東京大学名誉教授



建築家　東京大学名誉教授
大阪生まれ。独学で建築を学び、1969 年安藤忠雄建築研究所を設立。代表作に「六甲の集合住宅」、「光の教会」、「淡路夢舞台」、「FABRICA(ベネトンアートスクール)」「ピューリッツアー美術館」、「地中美術館」、「表参道ヒルズ (同潤会青山アパート建替計画)」、「ブンタ・デラ・ドガーナ再生計画」など。

79 年「住吉の長屋」で日本建築学会賞、85 年アルヴァ・アアルト賞、89 年フランス建築アカデミーゴールドメダル、93 年日本芸術院賞、95 年朝日賞、プリツカー賞、96 年高松宮殿下記念世界文化賞、02 年 AIA ゴールドメダル、京都賞、03 年文化功労賞、05 年 UIA（国際建築家連合）ゴールドメダル、レジオンドヌール勲章（シュヴァリエ）、06 年環境保全功労賞、10 年ジョン・F・ケネディーセンター芸術金賞、後藤新平賞、文化勲章。

イェール、コロンビア、ハーバード大学の客員教授歴任。97 年より東京大学教授、03 年より名誉教授。著書に「建築を語る」「連戦連敗」「建築手法」「建築家 安藤忠雄」など。

本年１１月に「文化勲章」を受賞され、各種行事等お疲れぎみかと思いきや元気いっぱいである。聴衆は安藤ワールドに引き込まれていく。

「今、アジアの中で日本だけが真っ暗に見える。もう一度光を取り戻すため、井戸知事は本気で頑張ろうと言われたが、本当に本気でやらなくては、関西・日本に復活はない。」と。「この危機的状況にあってなお、日本人は、みんな、どうにかなると思っている。淡路島立ち上がろう、と言うが、みんな今のままでいいと思っているのではないか。玉砕するくらいの本気の気持ちになるかどうかが問題だ。」さらに安藤節は続く。「「今で十分だ」と思っている人がいる限り、なかなか前に進まない。淡路島、兵庫県、関西、日本、アジアとグローバルに考えていかなければならない時代に、日本は島国として止まったままだ。韓国に行けば「日本は光がついていない」と言われ、中国では「日本は終わっている」と言われる。それなのに、日本は「アジアがやっと付いてくるようになった」と思っている。このずれは大きい。淡路島はもっと遅れている。絶望的だ。」と。私たちは、認識を新たにして、自分たちの町をどうするか、真剣に討論しなければならない時期にきていると再認識させられた。

「９５年の震災から復活してきたのは、なんとかして、もう一度このすばらしい町で暮らしたいという思いが私たちを奮い立たせたからだ。災害史上、もっともスムーズに復活したことは世界に誇れることだった。」日本の沈んでしまった状態を立て直すのは１人１人だ。安藤氏は提案する「今、若い人たちが立ち上がらなければならない」と。また、淡路島にエールを送る。「淡路島は温暖で美しい島であるし、兵庫県も海と山に挟まれた最高の環境をもっている。震災後３年間、この町を守るために県民は奮起した。もう一度、今度は、町の未来を作るために立ち上がらなければならない」と。淡路島を何とかするため「世界一、ワンスパン２ｋｍの橋をもつ島の人間として、自信をもって奮い立たなければならない。」と説く。「今日、この会議をスタートにしよう。ここから、未来を育てていこう。」確かに、この会議だけでは何にもならない。

安藤氏は特区に関連して「淡路島は温暖で三毛作も可能な土地だ。ここを農業特区にと提案し、農業立国の見本をつくろう。さらに、瀬戸内海は海洋牧場にしよう。思いの強い人がいれば必ず出来る」と。また、「この夏、瀬戸内芸術祭に参加した。直島を中心に家島等の島々を結んで芸術を見に行く構想だが、福武總一郎さんという猛烈にがんばる人が中心にいたから実現した。それぞれの島に船でいかなければならない不便な場所なのに、福武さんやチームの人たちの熱意で、人口２，５００人の島に９０万人が来た。連絡船はいつも積み残しだった。すごいな、よくやりきったなと思う。関係者の強い情熱が瀬戸内芸術祭の成功に繋がった」と人々のやる気や熱意の重要性を説かれた。

さらに「夢舞台にも、強い思いをもって続けられている植物園がある。新しいものをここから発信する、同時にここを農業特区にする、そういう人たちが集まってきてがんばってもらえれば、玉砕するかもしないが、淡路島は復活するのではないか。それには我々サポーターも力を尽くすべきだが、まずは地元の人たちが本気にならなければならない。瀬戸内海を海洋牧場にして、淡路島から農業の国、ニッポンをアピールしていくというように必死でがんばっていけば、淡路の未来も見えてくるのでは。そして、そこから新しい日本の姿ができるのではないか。エネルギー、食糧、資源がなくなっていくだろうアジアにあって、世界から兵庫県に住んでみたい、行ってみたいと言われるような、未来のアジアのモデル都市となることを期待している」と。日本全土で広がりつつある閉塞感を打ち砕くためにも、あわじ環境未来島構想を進めるためにも、「思い」「やる気」「がんばり」が必要不可欠であると感じられる講演であった。聴衆は、いろいろな局面でこの講演を思い出すであろう。

私こうして司会をさせていただいておりますが、私も特区構想の委員としてずっと関わって参りました。また淡路地域ビジョン委員会の委員長でもある立場上、ここで少し私にもコメントして欲しいとの申し出がありましたので、貴重なお時間をいただきましてお話をさせていただきたいと思います。

私自身この特区構想の委員となって本当に真剣に淡路島のことを考える機会となりました。この度は、淡路島の応援団として安藤先生や山﨑養世先生そして専門家の先生方、また知事を初めとする県行政の方々が中心となってこの特区構想を通じて淡路島の未来を真剣に考えてくださっています。本当に心強く嬉しく思います。でも本来はこの島の将来像は島民自らが中心となって描き創り上げていくものです。残念ながら私自身も含めて、多くの島民の意識がまだそこに至ってないのではないでしょうか。

この特区構想は、私たち島民が、改めてこの島のグランドデザインを自らが描いていく一つの大きなチャンスを与えていただいたのだと思います。

今日のディスカッションのテーマは、「日本の未来、淡路島の可能性」です。淡路島が日本の未来を示すということでしょうか。本当にそうなれると凄いですよね。

可能性といえば出来ないことばかりを探す人は、まちをダメにするといいます。私は常々、だれかがやってくれるとか、誰かのせいにしているうちは何も変わらないと思っています。先日あるまちづくりの専門の先生に「あなたは本気でやろうと思っていますか？」と尋ねられました。

先ほど安藤先生の講演の中でもおっしゃっていましたが、実は今日はこの本気の話をしようと思っていました。みなさんならどうお答えになりますか？

淡路島の可能性は、私は実はあなたの心の中にあるのだと思いました。私は、もっと本気になろうと思っています。先ほど安藤先生のお話を聞いて、もっともっと本気になろうと思いました。島の中を実際に歩いて、いろんな方のお話を聞いているとたくさんの方がいます。小さな可能性にかけて頑張っている人達がたくさんいます。そんながんばりがきっと大きな力になると信じています。

この島は、国生み神話の生まれた島です。私はこのような神話が何故淡路島に生まれたのかを探っています。そしてこの島の将来の姿を思い描くとき、この神話が大きな示唆を与えてくれるのではと感じます。

私は、子ども達にも神話の読み聞かせをしますが、まだぼんやりとですが、神話の心というものがあるとすれば、人と生き物との間に隔たりがなく、過去と未来が同じ価値を持ち古いものや弱いものを大切にする、誰かと競うよりも協調し、争いよりも平和を大切にし、他者を見下すよりも迎え入れるこういうことではないかと思っています。
そして神話は様々なものに形を変えてこうした心を伝えています。

国生み神話はここ淡路島に住む私たちみんなの心にきっと宿っていると思います。一人一人の生活の中でほんの少し立ち止まって神話の心を思い出すそれだけで何かが変わるのではないかと思っています。ここにこそ私が考える淡路の可能性があると思うのです。

皆さん今日を機に、この特区構想の前文に書かれているようにこの島から世界に向けて日本の進む方向性を平成の新たな国生み構想として私たちの手で作り出していきませんか？

どうか本日お見えの先生方も私たちの活動に力をお貸しください。お願いします。

木田 薫 きだ・かおる
淡路地域ビジョン委員会委員長
本シンポジウムの司会を務める。

司会　さて、今日はこうした可能性を自ら見いだし、この島に住んでこの島を元気にしようと頑張っている若いお二人に来ていただいています。私も大好きなお二人です。

意見発表

故郷は　近くにありてこそ　なお強く想うべきもの・・・

木・土・紙・石の家プロジェクトからはじまる新国生み神話

道上大輔

みなさん、こんにちは。

与えられた時間の実は３倍くらいの想いを用意しまして、とても話しきれないので、少し早口になるかと思いますが、どうぞご了承ください。

僕は瓦を作る立場としてこの場をお借りして改めて伝えたいことがあります。

まずここに一つの不変の価値を紹介したいと思います。こちらに展示してあるのですが、座面は見たとおり瓦で出来ておりまして、いわゆるスツール、椅子なんですが、この屋根材として必要十分条件を満たした形状が、この和瓦の曲線となっています。

山へと落ちた雨は谷へと流れる。モノのデザインというのはこのように自然を受け入れて自然と共にある、いわゆる自然の摂理にかなったカタチ、デザインというのが実は理想なんじゃないのかなという風に常々思っておりまして、この和瓦の形状というのは、その機能美をもって、なるべくしてなったこれ以上も以下もない究極のデザインであり、日本人にとってこの曲線は、まさしく黄金比率であると。だからこそ長きに渡って続き、今もなお日本らしい景観を形成しているということを冒頭に改めてお伝えしたいのです。このモノのカタチ、デザインというものから発展しまして、町並み・景観のデザイン、カタチ、そしてあるべき姿というものを考えると、こちらはヨーロッパ、フィレンツェの町並みなんですが全てオレンジの屋根で統一された景観を形成しております。訪れた方もいらっしゃると思いますが、本当にこの場に立つとおそらく体が震えるくらいの感動を覚えるんじゃないかなと。こういうまさしく秩序が整い統一感があり、さらにこの地に住む住人達はこれに敬意を払い、持続させようとする意志があるんですね。これが今まさに大事なんじゃないかなと。

ふと日本の町並みをこれと比較して見てみると、ごちゃ混ぜのアイデンティティというか、無秩序な個性が入り交じって、瓦を作る立場から見ると、もはや一種の景観破壊というような町並みが広がっています。景観の乱れというのはヒトのココロの乱れであって、ひいては国の乱れのあらわれなんじゃないかなという風に考えているのですが、残念ながら悲しいことは、住民・国民自身がそのこと自体に気付いていない。さらにいうと意識にも上らないレベルになっておりましてそれが非常に日本人としても残念だなと思っています。

例えば神戸の異人館に行くと、その魅力的な建築群の屋根を守っているのは、実は、いぶし銀の日本瓦が多いんですね。そういうことも意識して見られる方はあまりいらっしゃらないのかなと思います。

そういう統一感や秩序というものがあるからこそ、またその町並みが生まれたストーリーがあるからこそ美しく、人は惹かれて観光でこの地を訪れるのですね。そういうのが日本では少ない。

こちらの写真は、淡路島のある町並みの現在の写真ですが、このように昔ながらの屋根と屋根が折り重なるような町並みというのが以前はもっとあったと思うんですね。僕はこれをみて直感で感じるのは、この屋根と屋根の折り重なりの下には恐らく人の関係というのも折り重なっておりまして、つながりの深い豊かな地域コミュニティが存在しているのではないかなと思います。

僕は淡路島で育って田舎で育ったからこそ客観的に感じることなのですが、現在の区画整理された住宅地というのは、人の関係性まで区画整理されてしまっていると。またそのこと自体も意識に上らないという風な現状ではないかなと思います。

こういったことから、古き良き町並み、その代表例としてある伝統的建造物群保存地区や町並み保存地区のように、あぁいいなと思うだけの地区を保存するだけではなく、次の世代の人々が住んでみたいと思うような感性豊かで秩序ある新しき良き町並みというものをこれから創造していかなければならないと強く思っております。

そこで、1つの提案がございまして、あわじ環境未来島構想における「淡路島発　木・土・紙・石の家プロジェクト」です。そんな理想としての新しき良き町並みを創出するために、例えば瓦の可能性というものを最大限に生かして基本的にはその地にある木・土・紙・石から出来る建築、それはレトロであってもモダンであっても、またその地域の伝統的意匠を継承しようが、スタイリッシュで前衛的なデザインであろうが、その本質として素材が木・土・紙・石の自然素材で出来上がっているのであれば、全体として俯瞰して見ると本当に違和感のない統一感のとれた町並みとなることを経験的に知っております。そのことを前提に、その土地の職人をはじめ郷土の文化を深く理解し愛する多分野にわたる才能たちをフル活用して創りあげるモノは、すべてが成功だと思います。夏場の建築現場を例にとると分かりやすいのですが、僕もこういう立派な場所でしゃべらせていただいていますが、普段は瓦を作りながらトラックに乗って現場へ瓦を運ぶこともあります。瓦を持っていく段階というと、建築自体はまだ丸裸の状態で、柱が立って屋根が出来ている状態です。屋根が出来て土がのって瓦がのっていると。そしてちょっとその屋根の影に入って休憩すると何よりも心地よく涼しいです。そういうのは多くの職人達は経験的に知っておりまして、どんな人工的な断熱材で覆うよりも本当に人間として心地よい。木と土と紙と石、例えば、そんな自然素材で完結する家こそ本当のエコハウスではないかなと思います。

今、自然を強制的にコントロールするために必要以上のエネルギーを消費してはいないでしょうかということを問いかけたいのですが、例えば瓦の歴史というのは1400年。実は1400年前の瓦が現役でまだ屋根を守っているという建造物もございます。全て長く続くものには嘘はないということの証明だと思います。

残念ながら今これを支える職人の存在価値が大きく揺らごうとしています。しかし、その職人の手仕事、たくましく美しい手仕事に憧れて子ども達は夢をみます。「ああいう大工さんになりたい」とか「左官屋さんになりたい」だとか……。そんな職人達こそ実は、経験的にこの日本において何が一番良いのかということを最もよく知っているが、残念ながら寡黙を美徳とする職人気質というのがございまして、それが邪魔をして多くを語らない、また語る場も与えられないという現状です。今こそ声を大にして語るべき時ではないでしょうか。

何もかも数字で計れないと認めないこの世の中において、大いなる自然の力とその確たる歴史を信じる勇気を持ってみてはどうでしょうか。伝統を支える職人は、数字では計れない世界で実は生きておりまして勝負しております。しかし、この数値では計れない価値の集合体、集大成こそ、実は結果として数値で圧倒、圧勝するのではないかなと思います。地域に根差す人間力を結集した町おこしこそ、本当の町おこしであって、それが人と人とのつながりの強い社会を取り戻す究極の地域再生であると思います。

先ほどの、安藤先生のお話のようにスケールは大きくはないのですが、原点に立ち返った小さな小さなローカリズム、その集大成こそが大切なのではないかなと。昨今さもそれが絶対正義かのように、グローバル・グローバリズムという言葉が跋扈していますが、僕はあれにどうしても違和感を感じますね。中身が無いっていうか。グローバルという結果ありきで、根の張らない虚像を追い求めるようなグローバリズムが横行しておりまして、そうではなくて、この原点回帰こそが、そのグローバルへと至るプロセスを重んじる理想としてのグローバルへと繋がるのではないかなと思います。改めてこの島、淡路島、日本列島という島の声に耳を傾けてみて欲しい。空、海、大地、風そして人、そのあまりにも美しい価値に気付くはずです。

「故郷は　遠くにありて　想うもの」という言葉がございますが、僕は、何年か前からまさしくこのように言い換えるようにしています。

「故郷は　近くにありてこそ　なお強く想うべきもの…」

その地に住む人だからこそ、その地にしかない価値を知るべきであり、その地に住む人だからこそ、その地にしかない価値を伝えるべきであり、その地に住む人だからこそ、その地にしかない価値を未来へと繋げるべきであり、その地に住む人だからこそ、その地にしかない価値を新たに創り出すべきである。

国の始まりは淡路島……この淡路島からあるべき姿としての未来のカタチをメッセージとして発信することは意義深いことではないかと思います。神話を作るのが人の仕事であるならば、その神話を現実のものへと創造するのもまた人の仕事だと思います。今こそ立ち上がり、この美しい淡路島において、進むべき道へと踏み出す時であります。

瓦を作る立場として見えてくるものがあります。それは小さく狭い視野かもしれませんが、見失っている大切なモノ、コトに気付くための視野かもしれません。400年続くこの瓦の島、淡路島にて瓦製造業3代目として、日本の津々浦々にある素晴らしい景観を維持し、そして将来的

にも新たに創られていくことを信じ、また願い、明日も明後日もこの不変の価値であるはずの瓦と向き合い、汗を流す日々が続きます。

世の中が良くも悪くもどんなに変化しようが、この島空は美しい星々の巡りとともに変わらぬ時を刻み続けています。それはまるで地上にある営みを優しく包むかのように、そして未来へと続く確かな道とその方向性を示しながら……。どうしても俯きがちになる日々において、前をそして上を見据え、この美しい自然の表情と向き合ってほしい。今、変わるべきは人の心であり、取り戻すべきは人の繋がりであります。

淡路島がその地理的・物理的な距離感だったり、精神的・心理的一体感などからくる、いい意味での村意識を共有出来得るスケールであるならば、先駆けて地域再生のモデルを示すべき今がチャンスです。

言葉に力、想いに力があるならば、一人でも多くの人の心に響き、それがその先へと広く伝播する事を願います。

なにやら綺麗事ばかり駆け足で並べたような気がしますが、昭和と平成……例えるならアナログとデジタル、その両方の時代の良いところ悪いところというのを丁度バランスよく体感しているのがこの自分たちの世代、団塊ジュニアの世代だと思うので、今皆がこの綺麗事を真剣に叫ばないと何も始まらないんじゃないかなと思います。

大いなる自然の恩恵に感謝の念を込めて、今日の発表とさせていただきます。どうもありがとうございました。

道上 大輔 みちかみ・だいすけ
淡路瓦 400 年祭実行委員会代表
瓦 atelier 未来考房 クリエイティブディレクターとして瓦の新しい可能性を追求。

意見発表

全島まるごとミュージアムに向けて

やまぐちくにこ

みなさん。こんにちは。

洲本市在住のやまぐちくにこと申します。NPO 法人淡路島アートセンターに籍を置き活動をしています。本日は、このような機会をいただき、ありがとうございます。

「全島まるごとミュージアムに向けて」意見発表をさせていただきます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

私たちは、2004 年の台風で裏山の土砂崩れに遭い被害を受けた 1 軒の空き家を発見したことから活動を開始しました。そこから 6 年、淡路島アートフェスティバルと銘打って、毎年夏にアートイベントを開催してきました。

アートフェスでは空き家を活用し、紙コップアーティスト・LOCO と共に、昔、家が繁栄していたときに行ったであろう 結婚式を再現するというプロジェクトや、公園のうち捨てられた噴水跡においてアーティスト・タノタイガが、噴水をプールに変身させ新たな賑わいをつくり、場所を再確認するという試みなどを行ってきました。

これらのプロジェクトで伝えたいのは、「アート」を媒介に何に光を当てるかということが重要で、アイデアがあれば大きな予算がなくても魅力を発信し、様々な人とその魅力を共有することができるということです。見せるべき場所と人材そして見せ方の工夫が大切な要素だと考えています。

淡路島は、食の安全・環境の安全が保たれ、都会からのアクセスも悪くはない田舎です。この淡路夢舞台をはじめ著名な方の建造物、施設も点在しています。この条件で、定住や交流人口の増加の問題を長年抱えているのはなぜでしょうか。

淡路島に足りないもの、それは、ソフトと運営、活用していくプログラムそして若者だと考えます。「淡路島まるごと」という限り、淡路島全体でなければ意味を成しません。施設・建物・場所をうまく活用し、地域や他の施設同士をリンクさせていくソフトを作り出していかねばなりません。そこに、新しい価値観の創造と行動力が必要で、これらの仕事に適する、クリエイターである若者たちが必要だと考えます。

私たちは、アートフェスティバルの他にキャンドルナイトイベントや海の見えるビニールハウスのレストランを開催しましたが、私たちの活動には必ず、島外から若者が参

画しています。主な参加者は、建築系の学生や社会人そしてデザイナーですが、現場に来て地域とふれあい自分の手で形にするという経験は、「都会や学校や会社では得られない体験だ」といいます。回を重ねるごとに島に対するニーズがあり、有効なプログラムが創り上げられるということを実感します。

「海の見えるビニールハウスのレストラン」

どんどん閉鎖的な考え方が充満している中で、新しいものや夢のあるものが求められています。また、若者達は新しい何かを形にする機会を欲しています。この状況をいち早く淡路島はキャッチしなければならないと考えます。

そこで、今日は大学の先生もたくさんお見えですから、ご検討ください。淡路島で活動する学生に対して例えば単位を取得できるようなプログラムを一緒に考えていくことは出来ないでしょうか。そうなることで、学生達に表現のチャンスを与え、淡路島と関わるきっかけが出来るとともに、その成果が島にも反映できていくと思います。

また、行政関係のみなさまにお願いします。私たちは、今までボランティアで活動してきましたが、島の問題をプロジェクトに置き換えていくにあたり、ボランティアのみの活動に限界を感じてきました。私たちは文化芸術活動に責任を持って活動をしていきたいとメンバーそれぞれが考えていますが、雇用が生み出せない限りは、今の職を辞めてまで活動を行うということに踏み出せないところにきています。活動をすればするほど、島のソフト事業の重要性やニーズが見えアイデアを形にしていきたいという想いが募る一方で、誰もそのプロジェクトに責任がとれないというところが問題になってきています。どうかソフト事業に予算をつけてください。

淡路島まるごとミュージアム構想は、世界のどのミュージアムよりも大きく、しかもミュージアムで暮らすという新しい位置づけのものになります。

島に住む人、島に渡ってきた人たちが唯一無二の存在であることに気付き自分たちを保有する島に感謝する機会が生まれるよう、私たちは活動を続けたいと思います。

今日、会場に来ている高校生のみんな、淡路島には、君らにやれることがたくさんあります、チャンスもあります。この事を絶対に忘れないように、これからの生活をエンジョイしてください。

それでは、これで今日の意見発表を終わります。ありがとうございました。

司会　ありがとうございました。みなさん、いかがでしたか？厳しい現実の中で、もう先行きが見えないとあきらめの言葉をしばしば耳にしますが、こうして一生懸命前に向かって進んでいこうとしている人たちもこの島にはたくさんいます。今日は、そうした可能性があるということをわかっていただきたくてお二人にお願いをしました。みなさん、もう一度こうした若い未来に大きな拍手をお願いします。ありがとうございました。

やまぐちくにこ

NPO 法人淡路島アートセンター理事
「淡路島を耕す女」としてアート活動やアーティストと島の人々を結びつける活動を展開。

会場展示作品 - 立体 -

「夢の島とはやぶさくん」岡本純一（美術家）

スーパーのビニール袋等、廃材を利用した立体作品を
全国各地の住民らと共同で制作

中瀬　それではこれからパネルディスカッションを始めたいと思います。

最初、井戸知事の挨拶で淡路の秘めたる情熱があるとエネルギーを噴出する準備ができていると、そのキックオフのためのシンポジウムですというご挨拶をされておられました。その意味で今日はタイトルにもございますように徹底討論「日本の未来・淡路島の可能性」ということで進めていきたいと思います。

安藤先生の話にもありましたが、本気で元気という話がございましたのでぜひパネリストの皆様方、元気な方ばかりですのでよろしくお願いします。

進め方ですが三ラウンドでしたいと思います。第一ラウンドは農業環境水産分野でお話をいただきます。第二ラウンドは町づくりツーリズム文化等々を中心に議論をいただきます。そして最後に全員の皆様方で総合的な討論をしていただいて、もし時間があれば私がちょっとだけ口を挟ましていただく、ということでよろしくお願いします。

それでは早速パネルに入っていきたいと思います。まず最初に、農業水産環境分野で赤松さん、嘉田さん、南部さんの順でご意見を発表していただきまして意見交換に入りたいと思います。では、よろしくお願いします。

生きていることの喜びをたっぷり感じる ワンダーランド淡路島

赤松　ＮＰＯ法人淡路ファンクラブの赤松清子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私たちのＮＰＯの名前についておりますファンクラブのＦＡＮは、Ｆはフード、Ａはアグリカルチャー、Ｎはネイチャーを意味しております。

本日は農業水産環境をテーマとして、私たちＮＰＯが実際にこの淡路島で行っている取り組みを５分間のスライドショーにしてありますので、ご覧いただきこれからの淡路島の可能性を考えるヒントにしていただきたいと思います。

「海山田んぼワンダーランド淡路島で思いっきり体験」

まずは田植え。都会の子供たちは裸足で田んぼに入るのは初体験。はじめは歩くことさえ大変だけど不思議な足の感触がおもしろくってたまらなくなります。体験した後に、田植え機を見学すると機械化の意味が良くわかります。

これは鷺。大阪の女の子はフラミンゴといいました。こちらはヒガンバナ。大阪の男の子はヒヤシンスといいまし

た。田んぼの周りの自然も教えることで生き物も農業の恵みであると知るのです。

家族向けのイベントでは昔ながらの田植え定規を使います。これは他の人と息を合わせて植えていかないとはかどりません。子供だけではなく大人も真剣に作業します。除草も農薬に頼るのではなく手押しの除草機で頑張ります。田植えのときにまっすぐ植えておかないといけないことがよくわかりますね。

そして鎌を使っての稲刈り。自分が植えた、たった3本の苗がこんなに大きくなって実っていることに素直に驚き喜びます。わらを使って束ねる難しい百姓技も習って、ハザ掛けも体験することできちんと稲を束ねる作業の大切さを理解し、コンバインの威力に驚くのです。

また、精米体験もします。すり鉢と野球のボールを使って籾すりです。自分の息で籾殻を飛ばす技も身につけます。いっちばん真剣になるのがこの精米。瓶に入れた玄米を棒で突きますが、白米にするのになんと一万回も突かなければなりません。一粒のご飯のありがたさを身をもって感じます。大人気なのが臼と杵を使った餅つき。ちぎって丸めるのも初めてだと難しいものです。

これはレタス苗の植え付け体験。マルチシートを張ったところでも体験しました。収穫するときは大きくてしっかりとした葉が巻いているものを選びます。都会の小学校受け入れでは収穫だけではなく、淡路島レタスとプリントした本物のフィルムでラッピングも体験し、持ち帰らせることでスーパーでの買い物のときに、このマークを思い出してもらう効果も兼ねています。

タマネギの植え付けでは、苗がネギと同じような形をしていることにまず驚きます。単純な作業だけど子供たちにとっては面白いようで、夢中になってやめようとしません。11月に定植したタマネギは六ヶ月かけて、土の中で成長し収穫を迎えます。淡路島産がなぜおいしいのか、という理由もきちんと説明します。コンテナで出荷するものは葉や根を切ることも体験してもらいます。またタマネギの花も実際に見ることで、花の咲いたものは商品価値がないことも知ります。

タマネギ収穫は暑い季節の重労働であることがわかった後で、堀取り機の見学をします。また吊りタマネギにするための束ねる作業にも挑戦し、淡路島特有の風物詩であるタマネギ小屋に吊るすところまで体験します。

次は海が舞台です。漁から帰ってきたのはカタクチイワシの稚魚であるシラス。水揚げしたものをすぐに高温でゆで上げます。そして天日で干すのです。淡路島ではちりめんじゃこを加工している水産会社が多くありますが、とても手間のかかる100%天日干しは数少ないのが現状です。最近では、ちりめんモンスターという名前でおもしろがられていますが、モンスターではなくカタクチイワシの稚魚のことであって、ちりめん加工にとっては異物を取り除く作業の一環だということを学びます。

春の淡路島では磯遊びが楽しめます。遊んでいるうちに潮の満ち引きを目の当たりにするので、宇宙の不思議なリズムの中で人間も生きていると実感します。

ウニも容易く見つけます。取りたてを割って食べてみます。感動の味見ですね。このアカテガニ、陸に住んでいて新月の大潮に海におりてきて産卵します。その瞬間を見ると生命のドラマに心が震えます。

こちらは由良でとれたテングサを使ってのところてん作りです。煮詰めるときには部屋中が何とも磯臭くなるのも感じてもらいます。冷やして固めた後のところてんを突き、子供たちは大喜びします。都会の子供たちにとってはところてん、きっと初めて食べる味でしょう。

パネラー｜赤松清子氏

里山を楽しむには、やはりハイキングが一番です。農業用水や自分たちの飲み水となる源流を訪ねて歩きます。源流では鹿に遇ったり河原で狸を見つけたりして、水は私たち人間だけのものではないことを知ります。河原では小さな生き物もいっぱい見つかります。これはムベ。近江地方では不老長寿の食べ物として特産品になっています。

淡路島の里山にはたくさん実ります。種ごとほうばり胎座という部分だけ食べて種を吐き出すという面白い食べ方に驚きます。皮は天ぷらにすると甘みが増します。歩く途中で見つけた紅葉の葉も天ぷらにして食べてみました。

ハイライトは河原で捕まえた沢ガニの素あげ。生きたま

ましっかりあげます。私たちは毎日の食事で他者の命を頂いている、と五感で受け止めます。原木椎茸も自分たちでもぎ取り、こうやって豚汁にしていただきます。ごちそうさまでした。

生きていることの喜びをたっぷり感じるワンダーランド淡路島。ありがとうございました。

中瀬　はい、ありがとうございます。それでは嘉田先生。

都市と農村をつなぐ
世代をつなぐ
里山と里海をつなぐ

嘉田　ご紹介いただきました嘉田と申します。今朝、京都から淡路に参りました。私の方からは、淡路島の農業の実力がどんなにすごいかということ、そして、さきほど水、エネルギー、食料自給力の話が出ましたが、淡路農業のこれから、つまり未来への設計図についてお話させていただきます。

実は去年から今年にかけて、淡路に足を運ぶのはこれで７回目となります。なぜそんなに頻繁に来るのかですが、最大の理由は山登りとか魚釣りが好きな人間だからです。こんなにいろいろな種類の魚が釣れる場所はないと密かに思っています。実はもう１つきっかけがありまして、淡路農業を元気印にしてほしいというご依頼が南あわじ市さんの方から参りましたので、ここのところ折につけお手伝いにかけつけているのです。

そんな訳で、今年の８月、南あわじ市に大勢の人々に集まっていただきました。３００人もの農業関係者が集まられて「売り出そう農業シンポジウム」という行事が行われました。淡路の農業をどう売り出すかがテーマでした。
その時に、私からは、先ほどやまぐちさんがお話された「まるごと」という発想を使って、ひとつの提案をさせていただきました。淡路農業の持っている価値とか潜在力を、もっと丸ごと京阪神の人々に味わってもらおうじゃないか。それは、淡路産のすべての産品を丸ごと売りだそうという意味と、それからもう一つ、単に産物としての農産物だけじゃなくて、淡路島が持っている自然、歴史、文化、伝統、そういった価値を全部まとめて多面的に売り出そうではないか、そういう意味において「まるごと」の提案をさせていただきました。

その心は何かと言うと、「単に作ればよい」という時代はもう終わり、消費者に向けて「どう売るか」という戦略いかんで、製品の価格が決まる時代に入ったということが一点です。

もう一つは、価格や生産の効率性だけでものごとが動いている訳ではない。消費者が求めているのは、確かな品質であり、その食べ物がはたして安全かどうか、誰がどのように作ったのか、そんなこだわりの中身を知りたがっているという点です。例えば、沼島で行われる海の中に壇尻が入って行くという、あの壮大で素晴らしい祭りがあるでしょう。あの光景を見たら、多くの人は「沼島の海産物ってやっぱり違うよな」ということにつながるわけです。つまり、食というものは、本来、文化・歴史・景観そういったものが全部まとめて評価されているからなのです。そこがポイントではないでしょうか。

歴史という点では、淡路島の底力はすごいものがあります。万葉集の時代から「御食国（みけつくに）」として３つの国があげられていました。淡路、志摩、若狭ですが、海産物が豊かだという点で共通しています。ただし、淡路は他の地域と比べると、山の幸が圧倒的に豊富であり、その伝統が未だに続いている点で抜きん出ています。このような力量をまさに売り出すべき時だと思うのです。では、どうすればよいのでしょうか。

淡路島の食料自給率は兵庫県内市町村の中で断然トップですけれども、土地利用率で見ると、実は全国的に見てもトップに位置しています。つまり最も有効に土地を利用しているのです。しかも、その種類と品揃えは抜群です。海の幸、山の幸、何でもとれる。つまり、品揃えが抜群で、しかも一年中途切れることはない。これは非常に大きな魅力ですね。

日本広しといえども、南へ行くと北の方の産品はとれない、北へ行けば南の産品はとれない。しかし、淡路では両方とれるのです。しかも、１月から１２月まで産物が途切れることはない。これはすごい魅力です。この力を利用しない手はないだろうと思います。

このように、「産地力」、一定のまとまった数量を供給する力のことですが、淡路島は近畿の中で断然１位であります。立地条件は、先ほど知事がおっしゃったように申し分ありません。だから「丸ごと淡路島を売り出す」という戦略が生かされるのです。

次に技術力について。この写真は、私も審査に関わったこともあって非常に思い出深い賞だったのですけれども、あわじ農協さんが「環境に優しい農業大賞」という農林水産大臣賞をたしか平成六年に受けられたものです。近畿で農林水産大臣賞を受賞されたのはこれが初めてだったと記

憶しています。

その際、我々が評価した点は２つありました。１つは、環境と調和させる技術、フェロモントラップなどの新しい技術の採用、いろんなノウハウを取り込む技術力と向上心が高く評価されたことです。２つ目は、これだけ大量のタマネギなり、レタス、キャベツを作っていながら、なぜ連作が可能なのかという点に関連して、水田との上手な組み合わせ、そして土作りへのたゆまざる努力が評価されたということです。

今、地域農業に求められているのは、第１に、食の安全、安心をどう作るかということ、そして第２に、豊かな自然環境と調和させてほしいということですね。もう一つあえて付け加えるならば、元気な農業、元気な水産業であってほしいということです。そこで、どうすれば淡路島が安全・環境・活力という３つの目標を獲得できるのかについて、以下、３つの具体的な提案としてまとめてみました。

その第１、すでに申し上げたように、淡路の農水産業の産物を、できるだけ近畿の食卓、阪神間あるいは近畿２府４県の都市部に新鮮な状態で、丸ごと届けるシステムをつくるということです。橋を渡れば阪神間の２，０００万人近い巨大な市場がそのままターゲットとなります。例えば、南あわじ市の産品を西宮の「とれとれ市」で直売したところ、大盛況だったと聞いています。水産物、農産物が飛ぶように売れたのであります。農家や漁師の方々の顔が見えるということが重要なポイントとなったようです。

提案のその２、それは淡路らしい施設園芸を確立することです。これまで淡路の主要産品としてはタマネギ、キャベツ、レタスなどがとくに有名ですが、これらはすべて土地利用型です。施設園芸品目は意外と少ない。花きはありますけれども、施設園芸の作物は市場に出てこない。そこでタマネギ、キャベツ、レタス、そして米に加えて、何かもう少し付加価値がつく産品、地元の農家にお金が残るものを作っていただこうという提案です。そのためには、ひと工夫が必要です。温暖な風土を生かしつつ、季節ごとに淡路ならではの多様な作物を、他の大産地の端境期に供給することが戦略の基本となるでしょう。

ここでご注意いただきたいのは、淡路の特徴をどう活かすかという点です。通常日本の農業は、いかに省力化するか、手を抜いて楽な農業をするかが目標とされます。淡路の場合はそれとは違うのです。淡路の場合は小規模とならざるをえないため、伝統的に手を加えて、品質の良い商品に特化すべきです。つまり、手をかけて稼ぐのが淡路の伝統なのです。大規模農業は似合いませんし、それは環境的にもよいからです。淡路らしい施設園芸、これこそ今後の展開にぴったりだと思います。

パネラー｜嘉田良平氏

その際、あわせてご提案申し上げたいのが、「平成のため池づくり」という発想です。そこでこんなポンチ絵を描いてみました。淡路農業の悩みのひとつは、野生鳥獣被害がとても深刻なことです。イノシシ、鹿、お猿さんまでもドンと来るのですから、それはもう大変な被害だそうです。被害の大きさでは近畿でもおそらくトップクラスでしょう。それほど人々の力がやはり衰えてきた、それと里山の食べ物が減ってきたのですね。もちろん、この２つの条件はあるけれども、野生動物と共存できる道もあるのではないかと思うのです。そのためには農業も元気、そこに住む人々も元気でなければなりません。

この絵の右上部分は里山なのですが、山から落ちてくる水をこのため池で受け止める。そして、ため池群を鎖状につなぐ。このため池からサイホンで水をひいて、水道の蛇口をつけて施設園芸用の用水として使います。淡路は基本的に水が足りませんから。このハウスによって一年中、多様なこだわりの野菜を作ることができる。労働の有効利用ともなるでしょう。これは、ため池文化という淡路の伝統も生かすことができるでしょう。

最後に、３つ目の提案です。それは、後ほど齊木さんの方からお話があろうかと思いますが、「里山と里海をつなぐ」工夫です。里山ではますます人の手が入らず、資源の保全管理ができなくなりました。その結果、海の幸、山の幸も減ってしまいました。農産物もおいしいものはできず、農業にも元気がでません。その結果、ますます自然環境は荒れていきます。適度に手を入れなければ環境は守れないのですから。

淡路島のすぐれた環境を取り戻すためにも、里山を里海とつなぐ必要があります。それによって物質循環をより確かなものにしていく必要がある。できれば、この特区構想の中で、エネルギー、リサイクル、その他の環境づくりが課題となるでしょうけれど、農業もその例外ではないはずです。

以上、循環型社会を作り上げるためにも、農産物の直売システムをもっと活用しつつ、農業を環境と調和させることが望ましい。１５万人という淡路島の人口に加えて、来訪される入込客に向けて、付加価値をつけて加工品を売る。もちろん、同時に淡路の味と香りを阪神間に売り込むというストーリーが必要です。「淡路型直売戦略」という提案です。こうした新しい戦略によって、外からの血を活用しながら、淡路農業をもっと元気にしていこうじゃないか、という提案をさせていただきました。以上です、ありがとうございました。

中瀬　はい、嘉田さん、ありがとうございました。先ほどの赤松さんが命のつながりという繋ぐ。嘉田先生は都市と農村を繋ぐ。というのは淡路から出られた方もたくさんおられますね、人が繋がっていますから、あるいは世代を繋ぐ、里山、里海をつなぐ、いくつかの三つ四つの意味をもって繋いでほしいというそういう思いを込めております。

南部さんが終わった後、繋ぐということで三人の方々にふりますので、よろしくお願いします。では南部さんよろしくお願いします。

新しい文化と融合しながら
新しいまちづくりができる

南部　パソナの南部です。よろしくお願いします。舞子に生まれ育ちまして、そして神戸にずっと学生時代いたわけですけれども、神戸の震災のときに何かお手伝いできないかなと、そういうことからデパート、それからコンチェルトという船を浮かべて雇用に目を向けました。私はやはり仕事関係から、とにかく雇用を生むための仕組み作りをどうすればいいのだろう。みんなの雇用さえあれば元気な若者もきてくれるのだなと。若者がきてくれてそして、島の皆さんと一緒にわいわいがやがやすれば、そこには必ず新しい何かが生まれるはずだ。新しい文化も生んでいけないかな。そういう風なことを最近、考えております。

たまたまですけど２年前に若い人たちに対して、農業の方にやはり雇用の場を向けてみてはどうかと。農業が新しい雇用の場につながるぞと。そういう仕組み作りをやってみようと、そういう風に思って取り組んでみたのが淡路島における淡路チャレンジファーム、そういう企画でした。

パソナチャレンジファームとは、農業をベンチャーとして支援制度の創造をやろうと、どういうモデルの確立を目指せばいいかと、実は僕も農業というものが自分に対してどういうものであるかというのが東京にいるとわかりにくかったものですから、２年間いろんな分野の社会で活躍していた若い方々に、まず頑張ってみてそして半年か１年、２年以内に出来れば独立できる、そういうことが可能かどうかと、これをまずやってみました。おかげさまで地域の方々の協力を得まして、みんな生き生きと楽しく、本当におもしろいと、ITを触ってIT関係のインターネットだとかそういう文化の方、あるいはファッション関係、あるいは建築家と、本当に国家公務員の方々。優秀な方々が集まってきたそういうこともあって、地元の方々の支援をいただきながら、みんな元気に頑張ってくれております。

私は２年間やってみて、なるほどと自分なりに若者とそして農業というもののこの結びつきを自分なりに考え、この分野をもう少し広げてみようと、こう思っていたちょうどリーマンショックの後、今年、５５万人大学を卒業した方々が、卒業はしたけども仕事がないという、５５万人の内１２万人が仕事が見つからずに世の中に出されてしまった。そして世の中に出なくても８万人が大学に残った。いわゆる留年ですよね。

つまり５５万人中２０万人の方々が、有能な若者が、さまよい歩いているというかそういう状況になったと、これはつい今年の３月末に卒業した方々の今の半年後の結果です。来年度はまたこの２０万人がプラスになりますから５４、５万人足された方々の中から、多分３０万人単位の方々が仕事にあふれるだろうと、この方々に対して何か雇用の場、地域と日本を変えてくれるような、そういう場はないものかなという風なことを考えていました。

そこにふっと考えたのが、２年前からやりはじめたこの農業ベンチャー支援ということだった訳です。

僕の場合は、今回この淡路島で自分に何が出来るだろうと、自分がもしこの淡路島で自分の子供の時に何度も岩屋にきて釣りをしたり遊んだりしていたわけですけども、この場で雇用を生むという角度で見た場合に、何か貢献できるだろうと、雇用が生まれればみんな、あちこちから人が集まってくれると、集まってくれるとその新しい文化と融

合しながら、楽しいまちづくりができるなという風に思って、いろいろ考えていました。

多分この次ですけれど、私はできれば淡路島の人口倍増計画と、５年間で５つのプロジェクトをやればいいなと、５・５・５で行こうという一つの数字を自分なりに立ててみました。人口倍増がいいかどうかはともかくも、定住してくれる若者が生き生きと頑張ってくれるというわかりやすい動きを立ててみました。

パネラー｜南部靖之氏

そしてじゃあ５つの自分が出来るものは何だろうなと考えてみた場合に、この五つの分野かなと。

１つは文化、芸術、観光を発信できる島。その中でも特に漫画とアニメ。この分野、漫画は特に仕分けでなかなかうまくいかない感じはするんですけども、やっぱり僕は漫画あるいはアニメかなと、アニメの映画祭のようなものが年に一回ここで開かれるといいなと、そういう風なことを考えています。漫画もいろんな漫画がありますから、どの漫画の原画を持ってくるか、あるいは手塚治虫の手塚治虫ランドを作って、そしてエキシビションを開く、いろんな方法が考えられると思うんですので。

２つめは海のシルクロード。陸のシルクロードより海のシルクロードの方が国をまたがっているなと、これはNHK で作られた言葉でもありますけども、できればローマ時代のあるいは宋の時代の平清盛のあのころの神戸港への物資が海を通っての流通というかそれを再現してみたいなと。出来ればモロッコぐらいから始まって僕の好きなイタリアとフランスも入れてみようかなとチュニジアから始まってエジプトに下りてきてインドマレー半島こう通ってくればいいなと思って考えています。

３つめは、ヒーリングをやらねばならないなと思います。ここで癒されておいしい物がたべられたと。先ほどもいろんな話が出ておりましたが、この３つめにヒーリングアイランドと４つめには、ここには徳島大学もありますし、神戸大学もあると兵庫県の移動都市という考えもあります。

その４つめはやはりツーリズムにメディカルを。メディカルといってもどちらかと言えば、メディカル観光的なツーリズムかなと考えてはいます。

５番目は、音楽を中心としたクラインガルデン構想を考えてみたいなと。一人の音楽家が、淡路島に住んで自分の音楽をここで、ビジネスと一緒に考えて両立できるような仕組み作りが出来ないかなとこういうのを考えています。後ほどこれまた、５つのいわゆる５・５・５の５年間で人口倍増計画と。この５つをどのようにどの順番でプラットフォームにのせていくかというのは、また時間があれば、少しお話をさせていただければなとそういう風に思ってはいます。

この中で、いちばん最初に５番目のところからいこうかなと。この５番目のクラインガルデンの一人が淡路に住んでいろんな音楽を勉強してみたいと。勉強と言うよりも２つの義務をここにくると負ってもらおうと、そのかわりに音楽家には大きなメリットを与えようと。例えば、一人に 200 坪か 300 坪の土地と、そして小さな住まいを設けてその 200 坪か 300 坪で自分の一年間の食べる野菜は自分で確保しなさいと。出来るか出来ないかはともかくも 300 人くらいの音楽家が自分たちで物をつくりながら、そして１年に１回は、ここの伝統的なもの、浄瑠璃でもいいですし何かおもしろい昔から伝わったものをミュージカルにしようと。そして、歌う者、ミュージカルで演奏する者、それを照明で照らす者だとかいろんな形で 300 人が１つのミュージカルを創り上げるとそれが義務かなと言うことで今考えてはいます。

それとずっと後、あと４つの分野にやれば、さほどお金もかけずに、もし市と一緒に、それからこの島の皆さんと一緒にもし力添えをいただければ出来そうな感じがするなと、そんな風に思っています。

中瀬　はい、ありがとうございました。これで前半部分の３人の皆さんから発言があったのですが、いかがでしたか。

最初、赤松さんが、田んぼに入って足のヌルヌルした感触から始まって、香りの話があって、モンスターチリメンになって磯の香りがあって、いわば五感と言う話をされていましたね。その最後にいろんな生き物が繋がっているよ

という、そういうお話をされていました。また後の方で、補足をしていただけたら嬉しいと思います。

嘉田さんの方は繋いで農業をやろうよと。手をかけて淡路らしい農業だとか都市を繋ぐ施設園芸で付加価値をつけよう等々。里山と里海を繋ごうと、そういうキーワードで。

今、南部さんの方も最後にクラインガルデンと音楽家を繋いでいただきました。チャレンジファームの方もいつも頑張ってやっておられると横目で見ているのですが、若者と農業を繋ぐとか。これまでのいろんな提案がありましたけども、複数の領域に渡ってこういうことを考えてみてはどうだろうか、ということを三人の方から発言いただきました。

これらに対して、補足というか意見交換を是非、少しの時間してみたいと思います。どなたからいきますか？では、順番を逆に変えます。

南部さん、今までのお二人のお話を聞かれて、南部さんのコメントがありましたらお願いします。

南部　あれだけの豊富なものがやっぱり淡路島にあるんだなということを再認識しました。本当に申し訳ないけど、益々こんな日本どころか世界の淡路島のそういう要素があるのだと勇気づけられました。

赤松さんの考えられた子どもの姿を聞いて、いや待てよと。これは１つの映像でもって上手く発信の仕組みだけできれば日本中からここに２ヶ月か１ヶ月間で一番大切な教育に繋がるなという感じで見せていただきました。

中瀬　赤松さん、振っていただきましたので、教育というか環境学習その話をされていましたので。

赤松　ありがとうございます。私たちはああやって体験するときには必ずやはり農業・漁業の体験の場は、本物の農家さんのところへ伺いますのでその方達も繋がっている。

そして都市と農村の交流促進という部分では農林水産省の子ども農産交流プロジェクトその事業の中の周年化モデル構築事業というところにおきまして都会の小学校の農業受け入れ地を３年前から担っておりまして、実のところのべ21校1850名の小学生を今まで受け入れてきました。その体験の一部をスライドでみていただきましたけれども、そういったときに、実際現場の農家の方にもきちんと副収入が落ちるかたちを私たちはとっております。

大体平均額なのですけれども、10アールでお米を作った場合に、だいたい農家の方は12万～13万が収穫高になるんですけれども、小学校１学年さきほど生徒さんが映っていましたけれども、１学年受け入れると、農作業１回体験させることで、平均額としてですが約４万円が農家の副収入となります。これは生産高プラス副収入ということですね、約３割高の副収入が入る、ですから子どもや都会の人たちを受け入れて農家も励みになるし、都会の人たちも感動する。そういったかたちで繋がりを持って、地元の農家にお金が落ちる仕組み、これを作っていきたいなと私は考えております。

中瀬　嘉田さんとりで閉めてください。

嘉田　淡路農業のすごさという点で１つ思い出しました。それは、土作り、土へのこだわりであります。例えば、淡路ではタマネギでもずっと連作されていますよね。キャベツやレタスもそうです。普通なら、つまり他の大産地ですと、３年、５年も連作すると必ず地力が落ちてくる。やがて病害虫が発生しやすくなる。だから簡単に連作できないのです。淡路では面積がわずかで小規模でしたから、収穫後に水をはって、土作りに徹底的にこだわってきたという昔からの知恵と努力があったのですね。これから農業の教育を進める上で、そういう土へのこだわり、あるいは水を大事にすることなど、淡路の日本一をあげろと言われたら、１平方キロあたりのため池の数、これは間違いなく日本一です。このため池文化というものを、我々がこれからも引き継いでいかねばならない。淡路の農業・農村にはそういう生きた文化の宝庫ですね。やっぱり大事に残していきたいな、そんな気がします。

中瀬　ありがとうございます。ということでため池の話もぜひ頑張って新たな意味でのため池をどう再構築するか、それからさきほどのタマネギの話で思い出したのですが、やはりあの遺伝子ですね。管理をどうされているのかなと、これもしっかりやっていかないといけないですね、それから先ほど南部さんの海のシルクロードの話を聞きながら、この西側に五斗長遺跡というすごい遺跡が出てきました。先ほどのシルクロード、イタリアからきてやはり五斗長までというくらいの大胆な話をしていただけたら嬉しいなと思います。

嘉田　ごめんなさい。１つ追加で発言させてください。それは淡路のタマネギです。私は東京でしばらく住んでいましたけれど、どうしても淡路のタマネギが食べたくなって、友人に値段はいいからおいしい淡路のタマネギを送ってくれって頼みました。同僚や知り合いに、騙されたつもりでこれを食べてみてくれと試食してもらいました。すると「タマネギでも、普通のタマネギとはまるで違うね」と、とてもビックリしていました。こんなに甘い肉感のあるタマネ

ギ実は初めてやというわけです。これなら買う、お金もだすというのですね。ところが関東ではめったにお目にかかれない、実際には淡路産のタマネギとしては売られていない。やはり売り方をどう工夫していくか、というのがひとつの大事なポイントかなと思います。

中瀬　ありがとうございます。これで前半部分無事に終わりました。次に後半にいきます。ではお待たせしました、次はまちづくりツーリズム文化等々で、まず齊木さんの方から、発表お願いします。

私たちを導いてくれるアートの世界

齊木　すばらしい淡路の持っている自然の素地や、素晴らしい文化財産をたくさん紹介いただいたと思います。

私は、環境デザインをテーマに教え、仕事をしております。環境デザインと言いましてもどちらかと言うと空間を扱う研究を進めている訳なのですが、今紹介いただいた淡路の素晴らしい財産を淡路の中からだけではなくて、外から見ることも必要かなと思います。

さきほど繋ぐというテーマも示されましたが、私は1994年丁度震災の直前に、淡路でまちづくりをお手伝いする機会がありました。震災のあとはいくつかの地域の調査にはいりました。たくさんあるため池の水が抜け、大変悲しい思いをしたことを覚えています。その年に米が作れなかったと悲しんでおられた方もいらっしゃいましたし、汚泥で海が荒れていることも目の当りにしました。

なるほど、ため池と人々の生活と海は一体化しているんだな、そしてその向こうには、瀬戸内海がある。そのことを震災が私たちにまた教えてくれたと思います。

ということで、今日は視点を少し変えて海の持つ魅力と、それから淡路をとらえる捉え方を、示したいと思います。

今皆さんの目の前に映っているのは瀬戸内海を空からみた風景です。私は、この瀬戸内海に1つの魅力を確認するために旅をしました。瀬戸内海へ神戸から船を出しまして、尾道を経由して壇ノ浦までのルートを選ぶときに、私は1691年にケンペルが記録を残し、さらにはシーボルトが1826年にやってきて記録を残し、さらには1868年日本が開港した後リートホーヘンの記録を活用しました。

私は、小さな19.9トンの船に乗り神戸のメリケン波止場を出て、淡路の岩屋にまずやってきまして、そして室津にもやってきました。坊勢・小豊島・豊島・男木島・大辻島、そして瀬戸大橋をくぐって本島・塩飽諸島・真鍋島・鞆の浦・阿伏兎観音、そして尾道水道、越智の大島もあります、二神島もあります、二神島の風景から見る、丘の上から見る瀬戸内海の魅力です。

1番魅力を感じたのは沖の家室。この美しい夜景を見ているうちに日が沈んで、港に帰れなかったあの思い出もあります。牛島・国東半島これも素晴らしかったですね。そして関門海峡から下関・壇ノ浦というルートを展開しました。この経験を通して私は3つのことを淡路の方々と共有してみたいと思っております。

1つは淡路の祭りです。岩屋の祭りで大変感動しました。その布団壇尻といえば伊予西条の祭りがあります。去年はこの西条の祭りに3日間酔いしれました。

実は淡路の人たちも祭りが大好きですが、伊予西条ではあの石鎚山から流れる水を、磯上神社がうまくまとめ、その水の口をしめて、そして下流の町に水をうまく配分するしかけを祭りの中でしっかり組んでいるんですね。石鎚山から実は町から海まで水をめぐる祭りの1つの空間が繋がっている。

パネラー｜齊木崇人氏

それからもう1つの魅力ですが、淡路では天気が良いときには東海岸から生駒も見えますし、西海岸から瀬戸内海の島々がたくさん見えます。もちろん神戸は北側にすぐ近くに見えますけれども、海の向こうにある空間にもたくさんの魅力があることがわかります。尾道のこれは事例ですが、単に、人々がこちらに住んで他の人々が向こうに住んでいるのではなく、お互いに住んでいる空間を理解し、間の海を共有しながら住んでいるということですね。その様に考えますと淡路を考えるときには、単に瀬戸内海と淡路ではなくて、播磨・讃岐、そして和泉・摂津・阿波、このような空間がわたしたちの淡路を包んでいると理解して

良いと思います。

さらに淡路の中に入ってみたときに例えばこれは小豆島ですが、さきほど安藤さんもおっしゃっていた瀬戸内の芸術祭に私も参加しまして、この作品のなかでシンポジウムを開いてきたんですけど、「肥土山」という小豆島の中の空間がありましてそこに、台湾の原住民族の現代美術家が作品を作りました。まわりの風景を読み取り見事にその風景から作品が出来たと彼は言っていました。淡路にもたくさんアーティストはいますしアートの世界があります。今、この会場の皆さんの目の前にあるこの２つの大きなこの塊、塊という空気と私たちを導いてくれるアートの世界。これもたくさんの可能性を持っていると思います。そこでですね、ここからは私が自分の研究領域で瀬戸内海を巡って、見たものを紹介し、問題を提起してみたいと思いますが、瀬戸内海はどう生み出されているかと言うと海からだけではないんですね。

地図に川をすべて書き込んで、山の稜線を黒く塗りつぶしてみますと、この山の稜線にかこまれた領域から、瀬戸内海にたくさんの水と栄養分が運ばれています。これを私は瀬戸内海へ流れる水系とエコロジカルユニットという仮説をたてました。その水系が播磨灘を作り、阿波、紀伊、の塊を作り、和泉・摂津の塊を作ったといえます。私たちは、淡路島は一つだと思っていますけれど、実は、そういう周りの海との関係から見ますと播磨灘に面した空間、大阪に面した空間、紀伊水道に面した空間それぞれ表情をもっています。この違いは皆さんよくご存じです。ただしこの海をですね含めて使いこなしてない。さきほどの日本一のため池の分布をお話しされたんですが、研究室の学生が水系を塗り込んでくれまして、実は溜め池を全部書いてみますと、淡路の空間の構成がよくわかります。山の稜線です。そしてその次の稜線です。そしてさらに小さい峰があります。その間に水が活用されて、さきほどの嘉田さんの言われた農業生産が緻密な特色を持って行われている。地形を見てもそれが分かる。その向こうにそれぞれ海がある。この３つの海が生み出す多様性をどこから読みとるかと言ったときに、さきほどの岩屋で感動した祭り。実は淡路に布団壇尻の祭りがこんなに分布しています。その壇尻の祭りが行われる場所は神社があり、じつは水をうまく共有する首根っこにおかれていて、それがまた海と繋がっています。それが淡路のコミュニティを作りあげていると思います。これには見事な多様性があります。そのようなことで考えると、ただ単なる陸の話だけではなくて、目の前に広がる大阪湾や紀伊水道や播磨灘の特色をも取り込んで考えることによって淡路はもっともっと多様な価値観を引き寄せる。または、先ほど具体的なお話しをされました淡路の文化財産これを、もっと活用できる眼差しを持つことが出来るのではないかと思います。ただ、大切なことは、私たちは淡路からものを見るのではなくて、もう１つ視点を広げて日本の中での淡路の役割を見なければいけない。淡路は本当に日本のおへそです。そしてそのおへその地球のまた中心に私たちは今います。そのようなことで私たちのみる見方はですね、どこに私たちはいるのか、何を課題にしているのか、何を生かそうとしているのか、誰が実行するか、それをどこでやるか、私は、そのどこでやるかは先ほど示した山の尾根線で囲まれた水系を一つの単位にした小さなコミュニティが１つ１つの課題を持つべきだろうと、そしてそれらが１つの連携をした例えばお祭り、さらには蓑さんが今からお話しをしていただけるであろうアートやデザインの世界は、私たちの可能性を刺激してくれるだろうとそういうふうに思います。少し長くなりましたがマイクを蓑さんに渡してよろしいでしょうか。

中瀬　ありがとうございます。では、蓑さんよろしくお願いします。

暮らしの中の創造型芸術

蓑　今日は、本当にありがとうございます。

今、兵庫県立美術館の館長をこの４月からしていますけれども、本当に神戸に来て、関西といいますか大阪で11年間ほど美術館の館長をしておりまして、金沢に21世紀美術館を立ち上げて、４年いまして、３年ほどちょっと頭を冷やすためにアメリカに戻りまして、それでまたこの４月帰ってきました。この淡路島は安藤さんとの関係があるんですけれども安藤さんが本福寺を作っているときからずっと始めから最後まで眺めて何度かこの島を訪ね、本当に大きいのにまずビックリしましたし、それと今日のお話しで南部さんも海のシルクロードという言葉を使ってくれたんで、それで齊木さんは、最後は世界の地球を見事にだしてくれたもので本当にこの淡路島もそろそろこの海のシルクロードでもっと外へ外へと、世界へと羽ばたいてもらいたいなと。そのぐらいの価値はある島だと思います。私も兵庫県にいる限りなんとかしてこの淡路島を世界へと旅立つお手伝いをさせてもらいたいなと思っております。

それには、いろいろと課題もありますし、これは島民、皆さんのやはり気迫がないとなかなかうまくいかないと思いますね。本当にまず大事なのはやっぱり自信を持つということですよね。これだけの素晴らしいものを皆さん持っているわけですからあとは内に秘めないでもっと外へでるような仕組みをこれから1歩1歩築いていけば必ずこの淡路島と言うのは世界の中でも大変重要な島だと思います。この海のシルクロードのここ接点にローマへと続くぐらいの素晴らしい島だと思います。歴史も古いし、それだけ環境整備もそうですし、まず自立できる島っていうのが素晴らしい。シンガポールと同じ大きさと聞いています。それにして、14万人しかここに住んでいないというのは驚きだと思います。けれども、もっともっと我々も日本の国民も淡路島に対して認識が必要であると思う。それはやっぱり皆さんの力が足りなかったと思うんですけれども、それとも、もう本当に自分たちだけでいいと、あんまり外の人には関係ないと平和で生きていけばいいというのでしたらこれはもう仕方ないですが、そうじゃなくてやっぱりこれからの子どもたちというのは本当に世界で生きていけるそういう子どもたちになってもらわなければいけないと思うんですね。

本当に世界で生きていける、そういう教育もしていかないといけないと思います。私は美術館と美術でずっとこの世界に50年近く入っていますので、我々が出来るのは、その感性といいますか、センスというものが、本当に美術館、芸術を通してそういう教育をこれからの子どもたちに教えていきたい。それが将来弁護士さんになるかお医者さんになるかスポーツ選手になるか、起業家になるのもやはりこの感性というものが世界でこれから生きようと思ったら、この感性ですよ。ただ、努力すればもちろん試験も通るだろうけども、だけど感性と言うものは自然に体の中に生まれるものであって勉強したから感性が出来るのではないのです。

ということは、美術館に通うとか、スポーツをやるとか、もう普段生活の中にそういうものがあって初めて感性というものが生まれるわけですから、先ほどの道上さんのスライドの中でフローレンス、フィレンツェのスライドありましたけれども、本当に素晴らしい町づくりそれが、ルネッサンスの時代から今でもあのままの姿で残っているわけです。

例えば日本だと広重の五十三次の有名な版画をみて同じ場所を探しても一カ所もないです。これは我々が全部壊していったのだと思うのですね。けれども15世紀の絵を描こうと、今、実際に私がフローレンスに行ってもそのままの姿が描けますし、南フランスに行くとセザンヌであろうがゴッホであろうが、そのままの姿でイーゼルを持っていって描ける。日本ではそういう場所、全部無くなっていった。もちろん、戦争もあったろうし、いろんな震災などもあったろうかと思いますけれども、ベルリンもそうです。それからミュンヘンもそうですけど、見事にみんなその町を再現していると思います。でもどうしてこの日本があの素晴らしい都市をどんどんどんどん我々自身が壊していったのかと思う、だけど今淡路はまだそれができる可能性がたくさん残っていると思います。

パネラー｜蓑　豊氏

それを皆さんと一緒に例えばアートコロニーとか、これは一つの例で福武さんという素晴らしいプロデューサーがいるから出来るのだと思うんですね、淡路でもこういったプロデューサーがいれば福武さんがやった素晴らしい国際芸術祭ができると思いますし、これも小豆島までとか行っているのですからもう少し伸ばして淡路まで来て大瀬戸内芸術祭も一緒にできると思うのです。一人のリーダー、旗振り役がいないと、こういう大プロジェクトは出来ないと思います。

これも全部小豆島で、もう終わりましたけれども芸術祭90万人以上の人が来たというので私も本当にびっくりしています。こういう素晴らしいアーティスト、今ニューヨークに住んでいる韓国のアーティストですけど、これだけの有名な人がやっぱりこういう人がこういうところに来て制作するということが凄いことだと思いますので、淡路島でも是非出来れば良いなと思っています。

私から皆さんに提案なのですけど、誰か旗振り役を何とかして作るということがまず先決で、何の世界でも、そう

いうことが大事だと思う。私が考えたことは、京都に鷹ヶ峰というところがあります、そこに光悦寺という本阿弥光悦という素晴らしいアーティストが、今でいうとルネッサンスマンと英語で言いますが、もうあらゆる事に長けていたという人なのですけど、そういう人がいて陶芸家、それから漆工芸それから表具屋さんとか大工さんとかそういうのを全部その鷹ヶ峰に集めて一つの芸術村を作って江戸の初期ですがこんな素晴らしい人がいたわけで、そういうことでこの淡路島を鷹ヶ峰よりももっと大規模な芸術村ができると思います。

もう一つの例を挙げるとイスラエルのハイファの近くにエインホド（Ein-Hod）というところがありますが、日本でいうと丁度神戸みたいな町なのですけれども、その郊外にやはり鷹ヶ峰みたいな町がありまして、そこはもう政府が芸術村をその町全体を芸術村にして、その町にコロニーを作って今でも大変に活躍している町です。

そういうことも淡路でも出来るのかなと思いますし、是非皆さんツアーでも良いですけど、その町に行ってもらったらわかると思います。それと同時にそういったことができる素晴らしいアーティストが世界でも活躍しているような人をアートレジデンスといいますが、招待して1年でも住んでもらって皆さんと一緒に制作することによって若い人もいい勉強になると思います。またそれが一つの刺激で違う方面でもいろんな方面でも使えると思いますので是非それはやって欲しいし、それと暮らしの中の創造型芸術というのはせっかくこの淡路島に古い建物がまだ残っているので福武さんの家プロジェクトみたいな事なのですけどもそういう家を使いながらそこをアーティストに装飾するとか、町中をアートすることによって人が集まってくると思います。それと、海洋ツーリズム、海のシルクロードを私は想像しているのですけど、この淡路島を遣唐使の時代からもちろん浪速の地から船がこの淡路島を通っているわけですからこの淡路島がもっと世界への窓口、入り口になるようなプロジェクトを皆さんで行って欲しいなと。

私は大学3年の時にエジプトへ調査に行ったときに、何故エジプトまで行ったかというとあの遠いとこに素晴らしい中国の10世紀くらいから19世紀までの陶器が宝庫というか100万片以上の破片がカイロのフスタットという町にあり、そこを調査させてもらったのですけれども、本当にそんな経験をすることによって中国陶器のすごさが分かるんですけど、そこまであの時代に運ばれたのですから有田焼もエジプトで17、8世紀に運ばれているっていうことをエジプトに行って本当に感動したことがあります。是非そういうことを踏まえて淡路から海のシルクロードの一つの拠点として新しい観光資源としてやってもらいたいなと。

最後はこのアーティストサポートの創出ですけど、先ほどの私が言っている有名な名のあるアーティストを1年でもここに住んでもらってみんなで一緒に彼らと一緒に制作をすることによってまた新しい感性が生まれる。それによって淡路が世界へのホントの入り口また出口になると思います。皆さん自身が本当にやりたいという想いを安藤さんのお話ではないですけど、その気概、そして本当に淡路を淡路だけで止めるのではなくて世界の淡路島にしようという気概さえあれば必ず成功すると私は思っています。以上です。どうもありがとうございました。

中瀬　はい、ありがとうございました。

齊木さんの方から、カタカナでエコロジカルユニットモデルとエコロジカルユニットコミュニティというのがスライドの中で、横一で書かれていましたけども、要は前者の方は貯水池で後者の方が文化芸術コミュニティ。その複合体としてこれから考えていく必要があるよということから地球まで引っ張っていただきました。

なんで地球までひっぱっていったのかちょっと説明して頂けたら嬉しいなと思いますが、いかがでしょうか。

モデレーター｜中瀬　勲氏

齊木　はい。淡路にいて世界が見えると私は思っています。会場の皆さんの目の前に1つの地球が中に浮いていますが恐らくあのエネルギーを出している管がずっと向こうに新しい創造物に向かっているのかな？と先ほどから思っているのですけど、やはり私たちの今の時代は情報も経済も全て同時に動いています。そしてアーティスト達も蓑さんが言われましたけど、この瀬戸内芸術祭に来ているアー

ティストは世界からやって来ていました。世界が同時に動いている中に私たちはいると。いつまでも淡路という自分の見える範囲の世界だけではない、逆に言うと見えるものもちゃんとみてないかもしれません。風景を見る力も失っているし、車は便利だしパソコンの中に入っていけば自分の世界にちゃんと入れるし。ところが晴れた日に生駒が見えるあの姿とか、あのさらに小豆島からその向こうの方も見える西の夕焼けの風景とかたくさんの素晴らしいものがある、その眼差しをもう一つ外から捉える力をもう一度持ち直したいとそういう願望ですね。

中瀬　ありがとうございます。感性センスの育みって言うことで安藤さんも審美眼ってことを講演のときも大分使っておられましたが淡路では凄いその場所として先ほどは最初に赤松さんからも話がありましたけどもそれの最適の場所という風に蓑さんは思われますか？

蓑　場所全体が、島全体が素晴らしいし、もう少し学校も廃校も何校か見させてもらいましたが、ああいうところをもっともっと利用すればアーティストがそこで制作できるような場所を提供したらもっと素晴らしい人たちが来てそれが今の若い人たちが一緒になって制作することによってまた新しい感性がまた子ども達からも生まれるし、それがただアーティストになればいいというのではなくてそれによっていろんな職業にも繋がります。だからただ美術館行ってアーティストになるために美術館に行くのではないのですよ。そこに行ってセンスがあらゆる職業に活かされる。これは一番大事なこと大学では教えられない。学校では教えられないんです。これは小さいときから親がやっぱりお父さんがゴルフを一日やめてその日子どもを美術館につれていくとか音楽会へ連れて行くという習慣をすることが凄く大事ということを本当に日本の子ども達に向かって両親がしっかりしないとだめとそう思っています。

中瀬　はい、ありがとうございます。ということで、もう 4 時になってしまいました。このパネルディスカッションが 20 分遅れで始まったのであと 10 分だけつきあってください。

中瀬　パネリストの皆さま、1 分ずつお話いただいて、私に 5 分ください。ではお願いします。

赤松　5 分の原稿を書いてきていまして、どこを 1 分で絞ろうかと凄く迷ってるですが、私たちイベントもたくさんしていますし、淡路暮らし総合窓口も受け持っているのですが、問い合わせ件数も延べ 420 件で、実際に登録している方、個別の相談リストは 175 件あって世界も見てきているけどやっぱりこの淡路島の景観とアクセスがいいっておっしゃるんですよね。やっぱりそういう中で先ほどいろんな体験の感動を見て私なりの見解ですが都市と農村との役割分担これだと思います。都市と農村が交流することにより都市住民はリフレッシュとか感性を磨き自分の心のふるさとを淡路島で見つけて精神面を安定させ都市経済の発展に寄与してもらいそしてその対価を農村にお金で落とす。農村では本物の田舎体験を維持する事で地域資源が維持されていくとそういう風にしたいと思います。

中瀬　はい、ありがとうございます。では、嘉田さんお願いします。

嘉田　これから環境未来島に向けて特区構想が具体的に進んでいくと思うのですよね。そのときに皆さん方にお願いしたいのは、自分たちはこう考えているという事が実はいっぱいあると思います。隠れた思いというのでしょうか。そんな潜在的な意見や考え、あるいは対案などをどのように吸収していくか、そのプロセスをとくに大事にして欲しいと思います。なぜなら、農家や漁業者の方々は一般に、心で感じてはいてもめったに口に出すことはない。しかし、環境で最も大事な大地を耕したり、海を守っているのは、実は彼らなんですね。そういう声なき声をどう吸収して、本当に淡路の為になる意味のある構想づくりに置き換えていくか、そこが問われると思います。そういう検討上の工夫、プロセスを大事にして欲しいと思います。中瀬先生はじめ皆さん方、どうかその点よろしくお願いしたいと思います。

中瀬　ありがとうございました。では、齊木さんお願いします。

齊木　えっと私は、3 つのこと。

一つはですね、私は場所の力、場所がもっている力をやはり生かしたいと思うんですね。それが先生の言われた里山であり里海でありそして海の向こうに見える風景だと思いますね。これをやはり観光として考えると、淡路には数百の物語があるのではないかなと思うんです。いや、千を超えると言う人もいらっしゃるとかもしれません。それを実際に活用しませんか？そしてそれを上手く結びませんか？活用する、結ぶと言うことは次の課題ですが、私は提案してみます。

淡路から西側は、幸い蓑さん達が瀬戸内芸術祭の火をつけてくれました。芸術文化の火は淡路まで播磨灘をリンクにしたアートのイベントをやりませんか？それが一つです。

もう一つの東側は、大阪湾に向かって岸和田の壇尻も含めて大阪湾をリンクさせた祭りを淡路で提案してみませんか？例えばそのような淡路のエネルギー、今あるものを上手く活用する仕掛けが必要だろうと私は思います。

最後は井戸知事に申し上げたい。淡路の将来を考える、田ノ代海岸の環境整備をお手伝いしたんですけど国土交通省の圏域、漁業組合の圏域、港湾の圏域、全て制度やしくみで区切られています。一つの海を活用しようとしても、その制度が私たちの世界を閉じている、これ井戸さん環境特区の中で統合できませんかと問いかけてみたいと思います。

中瀬　まさに、総合特区でね、港湾海岸も運輸海岸も農林海岸も一体化して欲しいと。

はい、では南部さんお願いします。

南部　先ほど申し上げた５つの僕がしたい５つの、５番目のクラインガルテン。あの中で提案というか実行したいと。300 人の音楽家をこれから募集します。来年の三月末までに募集します。その方々に対して１年後に一つのミュージカル、淡路島に纏わる童話でも逸話でもあるいは歴史的なものでもいいですからその脚本が出来る人かあるいはそれに対するそのお手伝いが出来る人、そして高校生と、短大生と大学生、10 名このプロジェクト担当の何らかの方々を来年三月末に卒業する人を 10 名採用します。

音楽が好きな人ならば大丈夫です。300 名のクラインガルテンで住み込む音楽家を募集して町づくりをするための、一つは脚本家、プロデューサーそして中学生、高校生、短大生から 10 人の事務局のお手伝いをできる音楽が好きな人を来年三月末に募集します。パソナの僕の方に言ってきてください。

中瀬　はい。よろしくお願いします。では、蓑さん最後になりましたがよろしくお願いいたします。

蓑　私は一言だけですけど、最澄が言った言葉で「一燈照隅」という言葉がありまして、ひとりひとりが灯をともせば全体が明るくなる訳ですから、是非この淡路島のこういう素晴らしい島を皆さんの力で輝くように努力して欲しいと、それによってこの島が世界へと伸びていくと思いますので、是非、期待しております。今日は本当にありがとうございました。

中瀬　パネリストの皆さんありがとうございました。

今までの議論を踏まえますと、次の舞台の取り組みに皆さん方が行くためのいろんな提案がありました。それを総合的にこんな感じにまとめたらどうかなと思ってパワーポイントにしておりますのでパワーポイントを出していただけますか？

あわじ環境未来島キックオフアピールということで国生みの島、淡路からたくさんの希望を満たすため全島で力を合わせ、原風景を残しながら近未来のあるべき姿を示す自立した地域モデルとして環境未来島をつくりあげよう。

この中で３つございます。

１つは、太陽の恵みを生かす自給島をつくろう。先ほど農業のお話もいっぱい議論がありました。世界規模の資源制約や温暖化ガスの削減の期限が迫っております。地域として持続して経営していく為には、自然の恵みを生かしたエネルギーの持続等々が不可欠です。という主旨です。

２つめは、先ほどからずっと議論がありましたが、職と農とで世界に貢献する島をつくろう。これは、御食国淡路の強みを生かし、先ほどタマネギもございましたが食と農あるいは交流という切り口で世界に新しい事業と地域に新しい事業と雇用を生み出しつつ、食糧生産やこれに関わる人材育成の拠点として世界に貢献していこうという主旨でございます。

３つめは、万人が安心して楽しく暮らせる島をつくろうということで赤松さん等々からございましたが、子どもから高齢者までそして外国人までも含めて全ての人が住まい安心して暮らせる環境未来島を続けることができそれが魅力となって人が集まり、交流することを目指すという方向です。

という３つの方向をご提示いたしましたが、今日のシンポジウムパネルディスカッションをこういうことで締めくくりたいのですが、皆さんご賛同いただけますでしょうか。

（拍手）

はい、どうもありがとうございました。

持続する淡路島づくりの道のりはまだまだこれからで、今日の議論にございましたようにみんなで頑張っていく必要があります。日本全体が人口減少にある中にあって尚更です。

明治以降、私たちは一生懸命頑張って欧米のキャッチアップをしました。しかし、本当の豊かさって言うのが得られたのかというまだまだ疑問が残っております。

だからその豊かさを求めるために今日の基調講演あるいは皆さんの議論、ご提案にありましたように豊かなものをどう淡路で発見するのかといった方向でこれからも皆さん方と議論を進めて行きたいと思います。どうもありがとう

ございました。それでは、司会進行にお返しします。

司会　どうもありがとうございました。

それでは、パネラーの皆さんに今一度盛大な拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。

今日のシンポジウムをきっかけとして私たち島民自らが本気になってこの島を動かして参りましょう。

私たち淡路地域ビジョン委員会もその先頭に立って頑張っていきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

モデレーター

中瀬　勲　なかせ・いさお

兵庫県立大学大学院（専門職）緑環境景観マネジメント研究科長・教授
農学博士、ランドスケープ・アーキテクト。
専門は、造園学、景観計画、まちづくり。
淡路島特区構想推進委員会座長。

パネラー

赤松清子　あかまつ・きよこ

NPO 法人あわじ FAN クラブ事務局長。
生活協同組合コープ自然派兵庫創立に携わり、常任理事を経て現職。
平成 21 年 10 月より「あわじ暮らしの総合相談窓口」相談員も務めている。

嘉田良平　かだ・りょうへい

総合地球環境学研究所 教授、横浜国立大学大学院（環境情報研究院）教授を兼任。
環境保全型農業を提唱し、里山の再生修復活動に取り組む。
専門は、農政学、環境経済学。

齊木崇人　さいき・たかひと

神戸芸術工科大学教授・学長。神戸市統括監。
工学博士、一級建築士、専門は環境デザイン・田園都市計画。
ウエストミンスター大学客員教授等を経て現職。
淡路地域ビジョン委員会専門委員。

南部靖之　なんぶ・やすゆき

株式会社パソナグループ代表取締役グループ代表。
1976 年関西大学在学中に起業。
以来、新しい雇用の創造に取り組んでいる。
2008 年からは淡路島で独自の就農支援事業を開始している。

蓑　　豊　みの・ゆたか

兵庫県立美術館長。
オークションハウスのサザビーズ北米本社副社長、金沢 21 世紀美術館長等を経て現職。
美術館を核にした地域の活性化にも取り組む。

開会の挨拶

淡路県民局長　長棟健二

皆さん、あわじ環境未来島シンポジウムにご参加をいただきまして、本当にありがとうございます。

また、本日、基調講演、意見発表そしてパネルディスカッションと多くの先生方にご参加をいただきました。心より御礼を申し上げたいと思います。

さて、総合特区制度に関しまして皆さんご承知の方もおられるかと思うのですが、先般の事業仕分けで来年度予算の計上が見送りという判定になったわけでございます。しかし、これに対しては、菅総理大臣は政策として重要性は認識されたと言っておられますし、また、予算計上の精査等の作業も現在進められております。さらにこの総合特区を法律化するということでその法案の作成作業も進んでいるところでございますので、必ずや来年度予算に計上されるものと確信しているところでございます。

ただ、ライバルが多いですね。それに打ち勝っていかねばならない。そのためには行政だけが頑張ってもなかなか難しいということもございます。

やはり、淡路島が本気になってこの特区に向けて雰囲気を盛り上げていく。そして島民ひとりひとりが例えば環境、あるいは地域づくり、何でもいいのですが、地域を良くしよう、環境を良くしようということで取り組んでいただく。こういう事が大切だと思っております。どうかご協力の程よろしくお願い申し上げます。

今日は本当にたくさんの方にご参加をいただきました。

あわじ環境未来島構想を是非実現させたい。そういう想いでこれからも取り組んで参りますので、ご協力そしてご支援の程、よろしくお願いを申し上げまして閉会のごあいさつとさせていただきます。

本日はありがとうございました。

会場展示作品 - 花 -　片山実里（フラワーデコレーター）
淡路島の風景をイメージした作品

あわじ環境未来島シンポジウム
- 国生みの島からの日本再生 -

平成２２年１２月１６日（木）
淡路夢舞台国際会議場

主催：兵庫県
共催：洲本市
南あわじ市
淡路市
「環境立島淡路」島民会議
淡路地域ビジョン委員会

発　　行：平成２３年１月３１日

連 絡 先：兵庫県淡路県民局　総務室 地域企画課
〒656-0021　兵庫県洲本市塩屋２丁目４－５
TEL 0799-22-3541（代表）

デザイン：非営利法人淡路島アートセンター

本書内容の内容の一部あるいは全部の無断複写・転載を禁止します。

22 淡路 Ⓟ 1-001A4